地球の謎とき

ソラからの情報 1

はじめて人間に知らされた地球の謎とき本です。









著者　シラキノ　タエコ　　監修　ソラノ・フミヒロとソラ・プロジェクト

ソラ星出版株式会社

－目　次－

【はじめに】…… 1
【「目には目を、歯には歯を」の目は見るもの、歯は食べるもの】 …… 1
【ユダヤ人とパレスチナ人は同じ先祖だった】…… 1
【宇宙で一番大切なことは人間は皆平等であること】…… 1
【宇宙の始まりは“思い＝意識”が先にあらわれた】…… 2
【悪の始まり】…… 3
【宇宙は平等であることが一番大切】…… 4
《不思議な岩》…… 4
【原子の集まりが星になり並んでいた】…… 5
【地球は宇宙の不満の鉄の塊だった】…… 6
【地球を“宇宙の希望の星”にした存在がイシカミ】…… 6
【熱い地球を水で冷やした】…… 8
【地球はかつて２枚の長方形が重なった四角だった】…… 9
【四隅のイシカミたち】…… 9
【二つのブラックホールによるブンブン駒で丸くなった地球】…… 10
【イシカミの塊は自らの意志で移動し今の大陸を形成した】…… 11
【地球の中心には管が通っていて地球は呼吸をしている】…… 11
【小休止】…… 11
【イシカミたちは思うとおりの形になれた】…… 12
【動かない山や岩になったイシカミの原子たち】…… 12
【ソラから降りてきたイシカミの変化の色々】…… 13
【聖なる岩や山】…… 13
【イシジンは柔らかなイシカミの一部を切り取って石器を創った】…… 14
【ストーンサークルはイシカミの塊の一部が残ったものである】…… 15
【目のある石や石柱は思いを持っていることを伝えている】…… 16
【山になったイシカミがどのようにして石柱や石造建築物になったか？】…… 17
【イシカミの原子は思うとおりの生物になることができた】…… 19
【イシカミの原子は驚異的な増殖力があった】…… 20
【オーブとは、思いを持った原子が緩く結合した塊】…… 21
【前方後円墳などもイシカミの原子が増殖してできた】…… 22
【イシジン（石人）の誕生】…… 23
【初期のイシジンは山になったイシカミから抜け出して形になった】…… 24
【イシジンは古墳の中で創られた】…… 25
【イシジンは石箱の中でも創られた】…… 26
【遺跡や石像は原子たちがイシカミの中でその形をすでに作っていた】…… 27
【イシジンは浮いたり飛んだりして移動することができた】…… 28
【イシジンは水（お汁）で生きていて排泄をしなかった】…… 29

【イシジンは超能力でいろいろな形になったり、食べ物や金属も変化させた】…… 30
【岩絵やモザイク画などの模様はイシカミの存在を知らせている】…… 31
【アトランティス大陸はイシジンの究極の文明で栄えた】…… 33
【ムー大陸では何もせず遊んで暮らしていた】…… 34
【風や台風も思いを持っている】…… 35
【巨大地震は見えない彗星の落下とイシカミの膜の継ぎ目の大きな振動で起こる】…… 35
【人間はストーンサークルの中で誕生した】…… 36
【ミイラはイシジンから人間に変わる過程で亡くなったもの】…… 37
【人間は星の知恵で進化したのであり、自然に進化したのではない】…… 38
【初期の人間はイシジンに比べてとても弱かった】…… 39
【イシジンは人間を指導した】…… 40
【磁力と重力の発生】…… 40
【争うばかりの恐竜は大量の稲妻で絶滅し、その後は家族愛の動物が創られた】…… 41
【地球はゆで卵のようで、地下空洞や川などがあり、地球の中心にマグマは存在しない】…… 41
【連なったイシカミたちが抜け出た跡が噴水の水路となった】…… 42
【地球を希望の星にするために、協力をする原子たちが集まって太陽系ができた】…… 43
【古代の建築や装飾の意味】…… 45
【山城の謎】…… 46
【星のエネルギーとオーパーツ】…… 47
【いろいろな謎の遺跡】…… 48
【ピラミッドはイシカミの原子たちが競争して頂上を目指してできた】…… 50
【ペトラ遺跡はイシジンが住んでいただけで人間は住んでいなかった】…… 52
【ストーンヘンジはシリウスといて座のメッセージ】…… 54
【ポンペイの遺跡はイシジンがいたことを知らせるために灰に埋もれた】…… 54
【カッパ・ド・キアはイシカミが固まることを知らせたイシジンの地下都市】…… 55
【石の宝殿はテレビの形の変化を伝えていた】…… 56
【益田の岩舟はソラを飛んできた天の岩舟だった】…… 56
【世界の不思議な遺跡の謎】…… 57
【思い込みを外して】…… 58
【最後に】…… 59

【はじめに】

この情報は、地球の平和のために宇宙の意識体（ソラ、またはソラのもの）から知らされたもので、１９９８年から公開されています。

宇宙の始まりはどのようなものであったか？なぜ地球ができたか？なぜ地球は水の星で色々な生命が宿っているのか？人類はどこから来たのか？なぜ有史以前に巨石遺跡があらわれて消えていったか？なぜ現代の建築学でもできない、それらの巨石遺跡が残っているのか？

多くの答えがソラから知らされています。なぜこれまでの常識とは全く違う、地球の謎の答えが知らされるかというと、今の考えのままでは、宗教や民族の違いによって起きる争いが絶えないために、その気づきを促すためでした。

【「目には目を、歯には歯を」の目は見るもの、歯は食べるもの】

ソラの情報のひとつに、イスラムの教えの「目には目を、歯には歯を」があります。現在では復讐の教えとされていますが､最初の教えは違ったのです。その最初の教えは､「目とは見るもの、歯とは食べるもの」をあらわし、何かものを頂いたら誰かにお返しをして、地球の富を独占しないように、という良い教えなのです。

【ユダヤ人とパレスチナ人は同じ先祖だった】

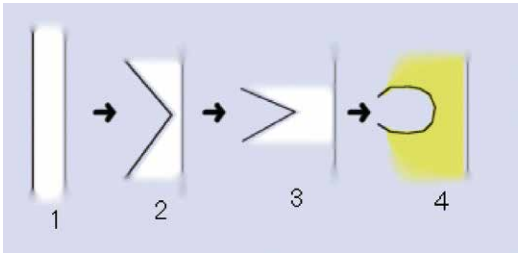
ソラの情報では、その証拠はエジプトの砂漠の中から出てきた太陽の船だと知らされました。大昔にイスラエルの国に住んでいた人たちが交易を求め、太陽の舟でエジプトに行きましたが捕らえられ、奴隷にされて母国に帰れなくなったということです。祖国に残った人たちが国を守っていましたが、長い年月の間にイスラム教を信じるようになっただけであり、その祖国を守ってくれたのがパレスチナ人だったということです。同じ先祖であったことは今では DNA でも証明され、それをイスラエルの歴史学者も認めています。

地球でいつまでたっても争いが絶えなく、人々の助けを求める思いが宇宙の果てまで届いているので、あらゆる異常気象などで厳しく知らせるように、宇宙で計画されたそうです。

【宇宙で一番大切なことは人間は皆平等であること】

平等であることは男性も女性も同じです。そして一番いけないことは他を支配することです。平等でないことが地球上の悲劇の原因でもあります。原子はあらゆる物質の元となりますが、その最初の原子は平等をあらわす平らな“へ”リウムとしてあらわれました。宇宙でヘリウムは一番多いとされています。それで宇宙の法則として、人間は皆平等ということを一番大切なこととしたそうです。ここで言う平等でないということは、大昔に争いで相手を滅ぼし、強力な権力や地球の富を独占した先祖の子孫が､今でもそのまま権力や富を持ち続け､特別な名称をつけて人々に崇めさせているということです。

【宇宙の始まりは“思い＝意識”が先にあらわれた】



ソラの情報では宇宙の最初は真っ暗闇で、その中で“誰かを捕まえよう”とする“思い”があらわれ、次に捕まれまいとする思いがあらわれました。そのことをこのようなビジョンと言葉で知らせてきました。その捕まえようという思いを持ったのが宇宙の大元（おおもと）で、捕まれまいとするのが弟でした。そして兄が弟を追いかけることで宇宙が始まりました。兄が弟を追いかけることで渦巻きとなり、その中心がギューと圧縮され、耐え切れなくなってパンと爆発して、光と共に原子が生まれました。それをソラのものはアンモナイトや穀物模様であらわしました。



原子は原子核の周りを電子が回っていますが、その理由は回っていないと真っ暗闇に戻り、原子が生れなくて物質になれないからです。そして光がないと真っ暗闇に意識だけが存在するということになり、そのことが嫌なので回り続けます。それは人工衛星と同じで慣性で回り続けています。さらに同じ思いを持っている原子が集まって、色々な物になれるからでもあります。



思いを持った原子になろうと、コピーの原子が光と共にたくさん生まれて集まり、大きな輝く原始太陽となり、宇宙は明るくなったのです。



北海道にたくさんあるこの花は、宇宙の大元をあらわす花と知らされました。黒いツボミは宇宙の始まりが真っ暗であったことをあらわし、意識が追いかけっこをすることで爆発して光があらわれたことを、線香花火のように広がった白い小さな花で知らせています。



また、タンポポは光があらわれてから原子が誕生したことを、黄色い花と綿毛の種であらわしています。種の一個が原子で、それがたくさん集まると物質として形があらわれ、綿毛がバラバラになるのは原子が結合しなくなると物質も分解することを知らせています。生まれた原子が色々な思いを持っているのは、人間が同じ親から生まれても色々な性格があるのと同じです。

【悪の始まり】



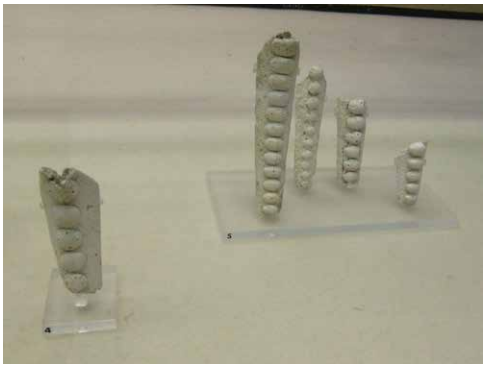
大元にいつも追いかけられて悔しいと思っていた大元の弟たちもコピーの原子を創りました。その一部は平等を嫌い、光の反対をあらわす“支配しようという思い”の原子の集合体でした。大元の弟はたくさんいて、そのうちの若者が長いもののヘビや怖いリューの姿となって人間を脅かしました。するとその姿があまりに恐ろしいので人間がひれ伏しました。それを見て大元の弟たちの一部が暴走をはじめ、悪さをするようになり争いの地球になりました。あまりに悪が地球を支配するために、宇宙では宇宙の始まりまで戻って、悪の糾弾をし、弟たちに違う進む道もあることを知らせました。



宇宙の大元は渦巻きによって原子があらわれたことを、アンモナイトを創りあらわしました。アンモナイトはカタツムリのようで、殻の内部は小部屋に分かれています。その接合部は細かいひだになっており、兄の大元が弟を追いかけていって圧縮したということを知らせています。



それに対して、弟はまず異常螺旋のアンモナイト（ノストセラス科）で、反対の思いを知らせました。次にアンモナイトの殻を取り去って、兄をやっつけたことを“ヘビ”としてあらわしました。古代の絵やモザイク画、石像などでそのヘビをあらわしています。そのヘビの集合体がリュージンで、一部の人間には恐ろしい姿として見えますが、中身はやんちゃな若者たちの原子の集合体です。



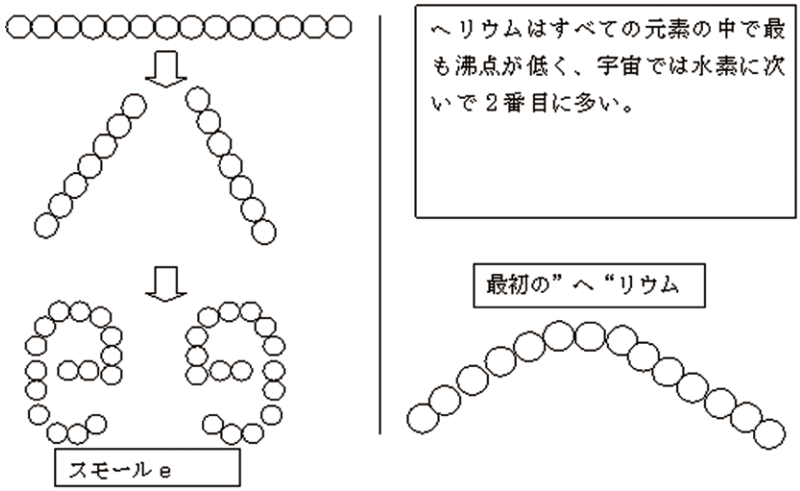
ヘビも小さな原子たちが“長く連なった”姿ですが、長く連なってもたくさんの良い仕事をしているエンドウマメなどの“ナガイモノ”もいることを、シチリア島の遺物で知らせてきました。

大元は次々と思いを持った原子を生み出して、色々な物質を作り出していますが、その反対にそれらを破壊し原子に戻す役をする存在もいて、それらが陰で悪を支配し、より多くの破壊を行わせていたことも最近わかってきました。そのような場合は、あたかも黒いリュージンのような雲で「全てのモノを飲みつくしてバラバラにしていく」という意味を知らせて、それは大震災や大津波などと関係するようです。

【宇宙は平等であることが一番大切】

宇宙の大元は“宇宙は平等である”ということが一番大切とし、最初に生み出された原子を平等をあらわす《“へ”リウム》と名づけました。“へ”はひらがなの字でなだらかな山のような曲線を描き、それは平等をあらわします。文字は宇宙の思いを持つ原子の集合体からからインスピレーションで人間に伝えられて、日本で始まりました。

下の図の小さな丸はニュー（ニュートロン）と呼びます。これらが長く連なってなだらかな山のようになったのがヘリウムの母体です。そしてその一部が更に険しい山のようになり、その頂上が噴火したようになり半分に分かれます。それらがそれぞれマルになろうとして小さな“e”の形になります。ヘリウムの母体の“へ”とスモール“e”が合体してヘリウムＨｅになりました。



《不思議な岩》









【原子の集まりが星になり並んでいた】

同じ思いを持った原子同士が集まって、より大きな塊になると星になりました。原子たちの思いが強いと、しっかりと手をつないで固体の星となり、その反対の場合はガス状の星になります。そうして長い年月の間に想像を絶するたくさんの星が生まれました。それらがきれいに並べられていたことを、フランスのカルナック列石で知らせています。



カルナック列石は有史以前から並んでいて、３ｋｍにわたってこのような大きな石から順に、小さな石が並んでいます。大きいのは２ｍ以上ある巨石で、小さいのは後年に人間が耕作するために取り除いたことも考えられ、途切れています。この他に、星がきれいに並んでいたことを、オリオンの三ツ星でも知らせています。



星たちは長い間、単にきちんと並んで存在しているだけなのが嫌になって、その不満が宇宙に満ち溢れていきました。けれどもキチンと並んでいることができる星もあり、それらと争いになり、争った星の残骸が天の川になりました。星の戦争後、今のようなバラバラの星空になったことを、オーストラリアのピナクルスで知らせています。ピナクルスの周りはブッシュなのに、ここだけ砂漠でこのような岩が乱立しています。

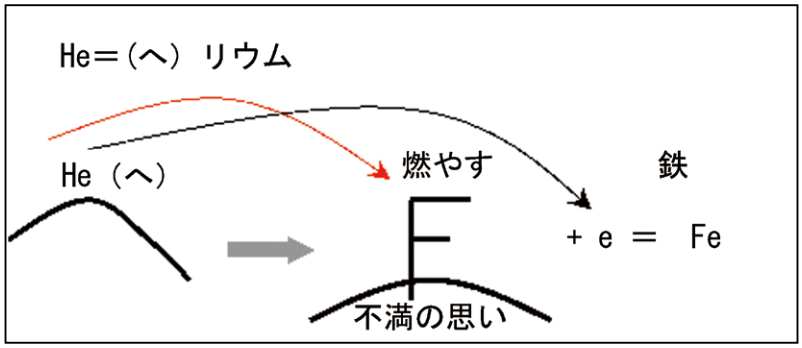


星がばらばらになったことをフランスからオーストラリアに、形であらわすように知らせる役をしたのが、これも有史以前からある巨大な地上絵の白馬です。イギリスにはこのような１００ｍを越える大きな白馬の絵や巨人の地上絵があります。

このように、宇宙のことと地上の遺跡はつながりがある、ということを複数の穀物模様を遺跡の近くにあらわして教えました。そのひとつには、新しい時代が始まるというラッパを吹く模様もあります。星も人間も原子の集合でできていますが、同じ思いを持った原子が集まった星は、強力な思いの塊となって、想像もつかない働きをしているようです。同じ思いを持った星たちは星の戦争をして自由に動き回ることができましたが、星として存在するというだけでは、不満の思いが無くなることはありませんでした。

【地球は宇宙の不満の鉄の塊だった】

宇宙には色々な思いを持った星が満ちていきましたが、ただ時間が過ぎていくだけでした。星たちの不満の思いはゴミとなって宇宙中に漂ったので、その宇宙のゴミを集めるために必要な原子の固まりが創られました。星たちの不満の思いはヘリウムの塊でしたが、その思いはヘリウムの幕を突き破って、潜望鏡のように頭を出して外界を見ている形の“Ｆ”（フッ素）の集まりになりました。そして不満を燃やしてあげようと、手をつないだヘリウムの母体のＨの原子が、稲妻となって一斉に駆け下り、Ｆ（フッ素）の不満の思いを燃やしました。それでそのガスの塊は、フッ素のＦとヘリウムの残りのスモールｅが合体して、“Ｆｅ”(鉄)の火の玉の塊になったのです。Ｆはキノコや彼岸花で知らせています。



こうして鉄の火の玉は次々と宇宙の不満のかけらを引き寄せていき、それがどんどん大きくなって、燃える火の玉の星の“地球”になりました。真っ赤になって煮えたぎった不満の思いの星“地球”は、宇宙をウロウロとして他の星たちから嫌がられるようになって、銀河系から出て行こうとしました。(現実に地球は銀河系の端のほうにあります)

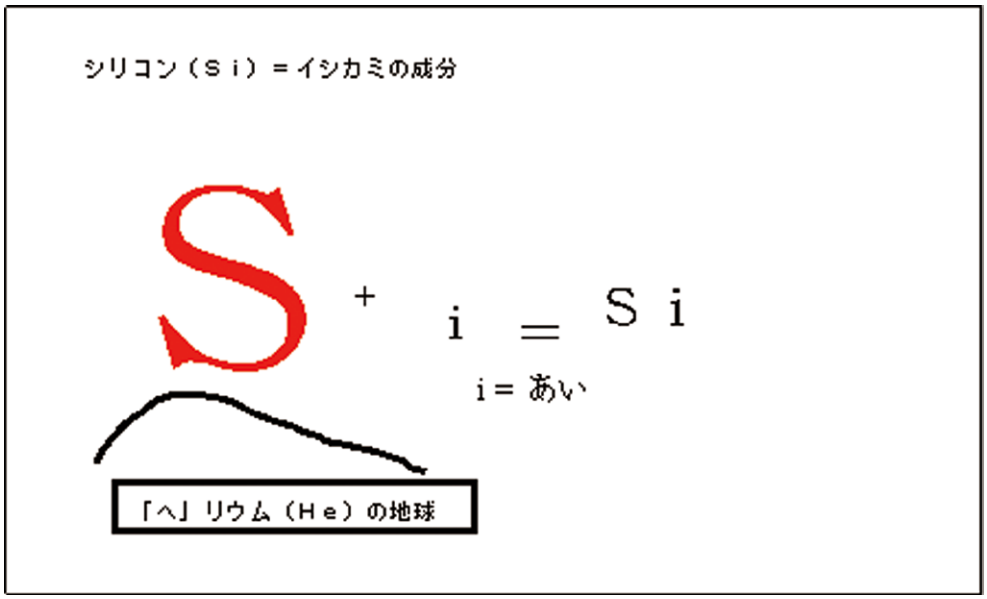
【地球を“宇宙の希望の星”にした存在がイシカミ】

宇宙の大元はその嫌われ者の火の星を“宇宙の希望の星”にしようと思い、最初に生まれて大元の近くにいるいて座に相談しました。それでいて座から地球を希望の星にしようという「思い＝意識」が地球にやってきて、地球の近くでヘリウム原子に入ってから手をつないで、クラゲのようになって地球に降りてきました。それをイシカミと呼んでいます。(パラオのタコクラゲが一番、形、色、機能などがイシカミに近い形で、その他に柿もイシカミの形をあらわします。モスクの丸い屋根も同じで、ミナレットと呼ぶ尖塔はイシカミのことを伝える筆をあらわします)



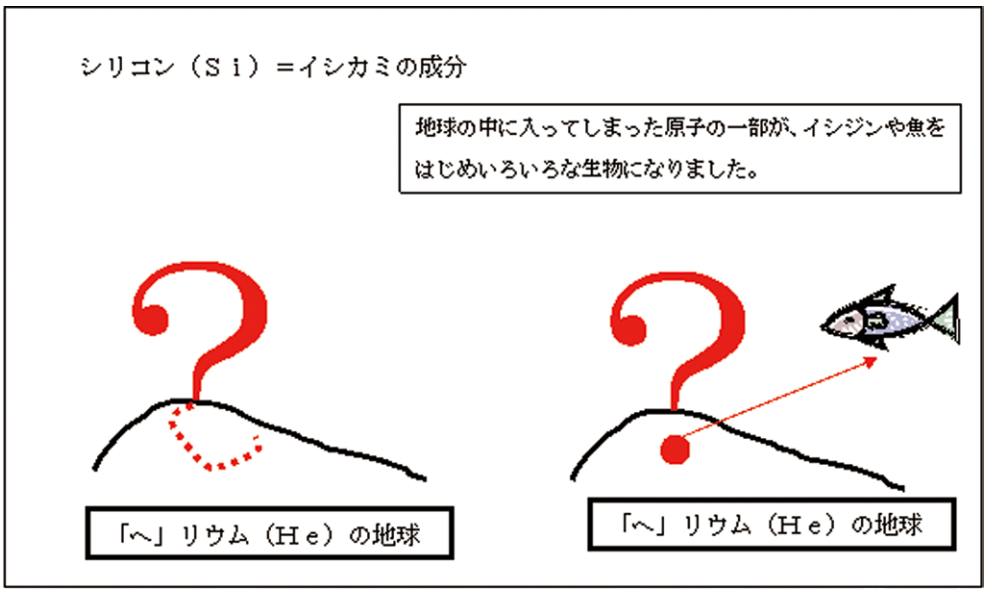
地球を希望の星にするためにいて座からきたイシカミたちは、手をつないで煮えたぎった地球に“へ”リウムの形で突入しようと思いましたが、飛び込むのには勇気がいりました。

そして飛び込んでもここから出たいという思いもしたということを、“ Ｓ ”の字であらわしました。(Ｓはイオウで地中から噴出します)それでも突入した勇気のある“ Ｓ ”を、小さなアイを持った“ ｉ ” が好きになり、一緒になってＳｉ（シリコン）になりました。そして地球上の山や岩になりました。また、色々な知恵を与えたシリウスもＳで始まります。



（Ｓｉの成り立ちの図）

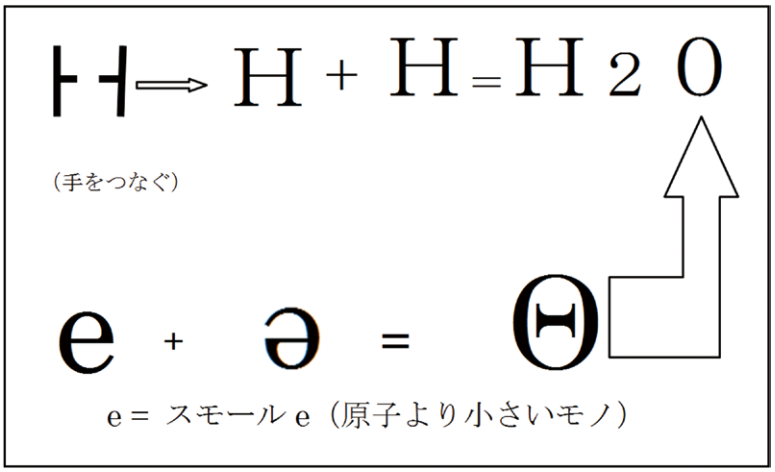
けれども地球を固めるために地下にもぐったシリコンの一部は、“ ？ ”の点のない形になりました。その後“ ？ ”の点が、地下のイシカミとして噴火などで外に出てきて、生物などになる大きな働きをすることになります。



（？の成り立ちの図）

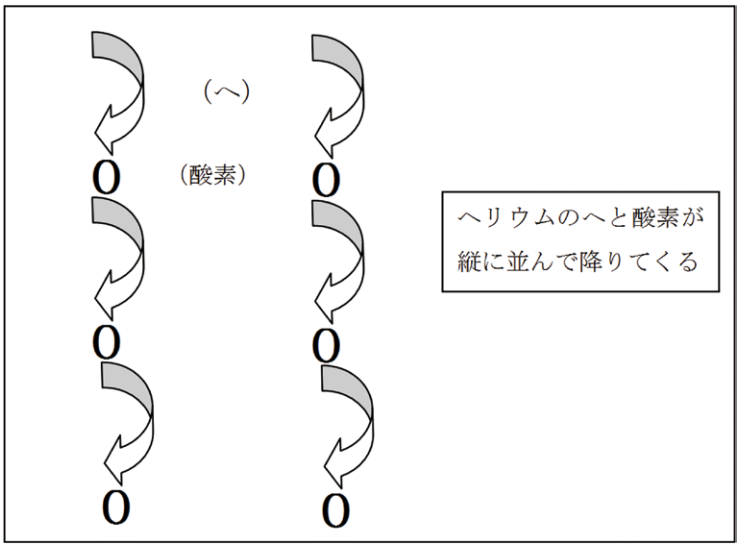
そのようにして降りてきたイシカミのシリコンは、お互いにしっかりと合体して、丁度小麦粉をこね合わせたようなものになり、それを薄く延ばしてより面積を広くして膜となり、地球を包みました。膜になったイシカミは、お互いが手をつなぎあって地球を覆いましたが、そのつなぎ目がプレート理論で言われる継ぎ目になります。

【熱い地球を水で冷やした】



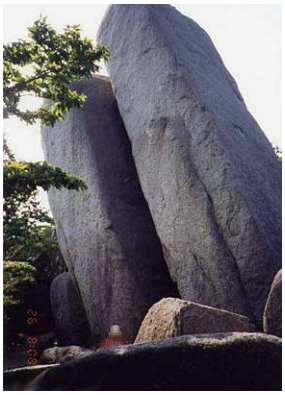
（H_2Oの成り立ち図）

イシカミたちはそのようにして地球を覆ったのですが、余りに高温のために宇宙に助けを求めました。そのために太陽系が創られ、地球を助けることになりました。そのひとつの水星は、地球を冷やしてあげようと思う原子たちが集まってできました。けれども水星のモノたちも、一人で地球に降りていくのが怖いので、二人で手をつないで降りていったその形がHの原子です。そして宇宙は平等というので、たくさんあるＨｅのｅが二つ重なり合って、輪になる形のＯ（酸素）となり、H_2と一緒になってH_2Oとなり、地球を冷やすイメージをすることで水 H_2O になりました。けれども余りの高温で水だけでは冷やしきれなく、塩の原子たちが応援してくれることになり、水と混ざることでより冷やすことができました。それで陸にも岩塩があるのです。



（H_2Oの成り立ちの別な見方）

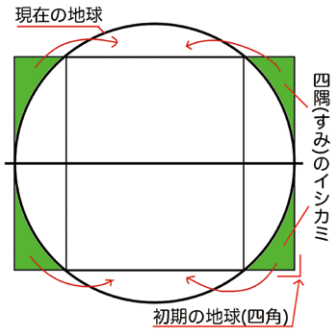
【地球はかつて２枚の長方形が重なった四角だった】



イシカミたちは、ドロドロに溶けた地球に突入し、フラフラする“丸い地球”を固めるために“四角いもの”シリコン Si になりました。地球は冷やされ鉄の原子と一緒になることで、ようやくフラフラしなくなりました。シリコンで固められたので地球は四角になり、ちょうどご在所岳のオバレ石の２枚の石のようになりました。そのオバレ石は、“山が語りかける口”として、初めて人間に言葉を使ってコンタクトをとってきました。四角い地球は平原が広がり、太い川が流れているだけで海はありませんでした。天動説の時代には、地球の果てに行くと地球から落下すると信じられていたのですが、それは本当でした。エンジェル・フォールはあまりの高度から落下するので、川は途中で霧となり地上には水として落ちません。当時の地球の端はそれと同じで、川の端から落下した水は蒸発して空に上がっていました。そして地球の初期には空に水の膜があり、霧のような雨が降るだけで湿気を与えていましたが、その後水の膜が無くなってからは、水は雨となって降りました。ちなみに、水の膜が壊れた時にノアの洪水が起き、各地に大洪水の伝説が残ったのです。初期の地球が平らであったことを、北海道の石器や石冠などの遺物によって知らせています。



【四隅のイシカミたち】



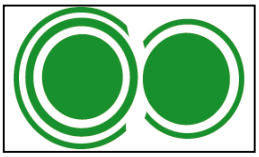
初期の地球はコンニャクのように長方形で平らな形になって、宇宙から形になりたいと思って降りてくる原子たちを受け入れやすいようにしていました。けれども宇宙から色々な悪い思いを持った原子たちがあまりにも多く降りてくるようになったので、丸くなって自転をして振り払おうと思いました。粘土のような軟らかいイシカミで包まれた地球は、丸くなるとヒビが入りにくい形になれるからです。宇宙から嫌なモノたちが降りてこないように丸くなるには、四角の四隅が邪魔になるので、四隅のイシカミは分解して再び原子になりました。そして後から再び地球に降りてきて色々なものになりました。その四隅のイシカミは、良い仕事をしたことを伝えるために、日本ではスミヨシ（隅良＝住吉）神社として人間に伝えていました。また四隅突出という変わった塚になって残し伝えています。





【二つのブラックホールによるブンブン駒で丸くなった地球】

長方形の地球の四隅のイシカミたちが、中央に集まり丸くなったことを《ビジョン》の“長方形の雲のような白い光が２つあらわれ、それがいっしょになってひとつになる。その後黒い棒が縦にあらわれる”ことで知らせてきました。《ビジョン》とは、“目を閉じていても見えるもの”で、風景のようなもの、人物、漫画のような絵、動くアニメのようなものなど色々です。

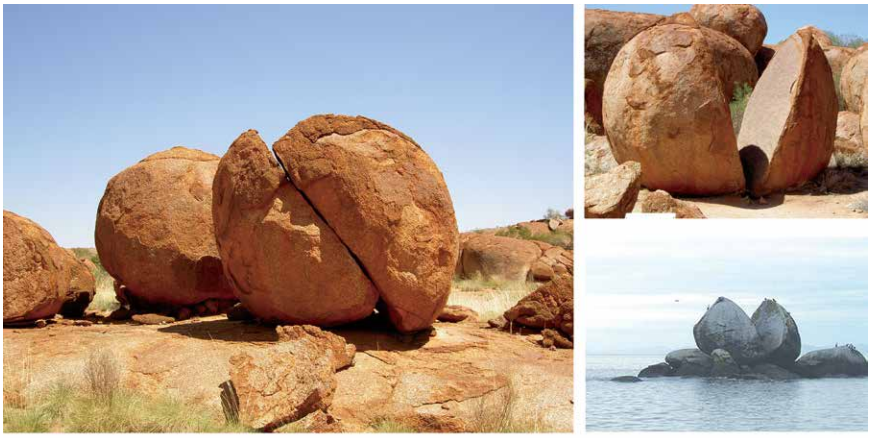


オバレ石の２枚の長方形がロールケーキのように丸まり、二つの団子のようになるのは、アイルランドのタラの丘であらわしています。そしてさらに地球を丸くしようと思うニウたち（星たちの子どもでニュートリノ）がどんどん集まってブラックホールになり、二つのブラックホールが綱をひっぱりあい“ぶんぶんゴマ”と同じ運動で地球は丸くなっていきました。それで地球はひとつの球体になり、その球体を半分に切ると、りんごを半分に割ったような形になりました。それは北極と南極がつながっていることを知らせています。



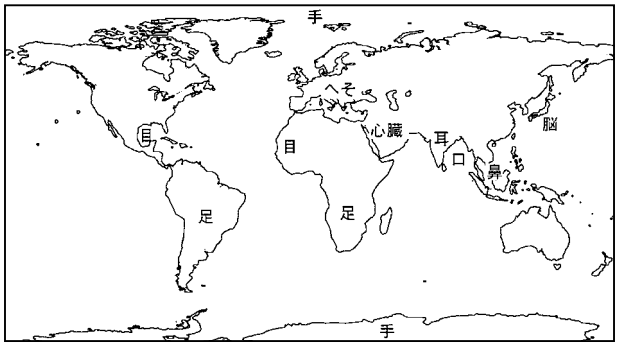
ソラのものはこの状態を、シチリア島では陶器として残していますが､私がこれと出会ったその前（２０１１年）に、ナミビアでこれと同じ形のものが降ってきて、謎とされています。

柔らかかった地球が丸くなると、仕事を終えたニウたちはその後分解して、ブラックホールは消えました。ニウたちだけでは何の形にもなれないので、形が残っていないのです。オーストラリアやニュージーランドの巨大な半円の岩は、地球は南半球と北半球が離れていることを知らせています。それで地球上の南半球と北半球では、風の流れなどが正反対なのです。



オーストラリアの砂漠（左、右上)、ニュージーランド（右下）

【イシカミの塊は自らの意志で移動し今の大陸を形成した】



最初に地球に降りてきたイシカミたちが膜になって地球を覆った後、次に降りてきたイシカミたちは大きな塊で降りてきて、超大陸と言われているパンゲア大陸になりました。それからパンゲア大陸の一部のイシカミたちは、それぞれの思いを持って移動をし、それぞれの大陸に分かれていきました。

地球を象の形にしようと思うイシカミたちは、雨の降る大陸の南アメリカ、雨の降らない大陸のアフリカを地球の足としてあらわしています。インドは耳を、インドネシアは鼻をあらわし、象の鼻はいつもブラブラとして一番地震の多い半島になりました。けれども中央のユーラシア大陸に降りたイシカミたちは動くのが好きではなく、そのまま残り大きなユーラシア大陸となりました。そしてそれらは動かないでおこうと今でも思い続けているので、それでその地域の人間も同じように変化を求めないで、大昔に知らされた教えを守り続けています。また、象の牙をボートのオールに見立てて地球が自転していることをあらわし､鼻で吸い込むことで引力をあらわし、大きな耳を動かすことで偏西風をあらわしています。

【地球の中心には管が通っていて地球は呼吸をしている】

南極大陸はもっと北の方にいましたが、地球が丸くなったために両極は非常な寒さになることが分かって今の場所に移動しました。なぜかというと、地球の真ん中は穴が空いた通路となっているために、地球が呼吸をすると南極の寒気が北極まで吸い込まれて、北半球にまき散らかされるからです。そこで南極側の穴をふさぐために南極大陸は今の場所に移動しました。氷に覆われた南極に恐竜の化石がたくさんあるのは、このように以前は暖かな地域にいたのが、極に移動したからです。２０１２年にロシアが南極の氷床をドリルで掘削し氷床底のボストーク湖に到達したことで、地球の中心の穴を通り、南極の寒気が北極へ吸い込まれ北半球が異常な寒気に襲われました。

【小休止】

世界の七不思議というのは、年代や選者により違ってきますが、それが造られた年代ではいろいろな理由で製作不能というものです。その中のいくつかは本書でも取りあげていますが、その他のものでは、オリンピアのゼウス像は座像で約 12 メートルもあり、杉の木で作られており表面は象牙で覆われていたようです。またロードス島の巨像は、紀元前３世紀頃にエーゲ海にあったもので、その高さは３４ｍもある青銅製の像で、高さ１５ｍの大理石の台座の上に立っていたそうです。その像は港をまたぐ姿勢であったという伝説もありますが、到底人間の力では製作不能です。これらは、このような巨人になりたい原子たちが集まったことで、その形になることができたのです。

【イシカミたちは思うとおりの形になれた】

イシカミたちは“思うとおりの形になる”ことができました。地球が冷えて固まった後に降りてきたその原子たちは、山や岩のように動かないものと、自由に形を変えることができる植物や動物などの生物になりました。

【動かない山や岩になったイシカミの原子たち】

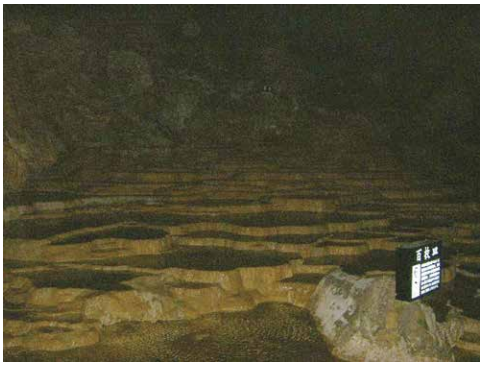












地球に降りてきたイシカミたちは、同じ思いを持った原子たちが集まることで、無数の不思議な形の岩などになりました。それは自然にできたと思われるのが嫌だと思う原子たちが、自然にはできないと思われる形などになって、岩が思いを持っていることを知らせています。それで、色々な不思議な形をした岩などが世界中にあります。また、降りてきたそのままの形で山になったものは、大きすぎて自由に動けないので、小回りのきく形の小さな分身になったのもあります。オーストラリアの広大な半砂漠の中に突然現れるこれらの石で、大きな岩が分かれて分身を作れることを知らせています。またトルコでは、岩山の親と、その分身の奇妙な岩で知らせています。

ルーマニアには岩から丸い石が、まるでお餅のように現在も生まれ続けている岩がありますし、静岡県には子生まれ石という丸石が生まれ出るのもあります。

柱状節理の岩は、人間が家を建てるために柱がほしいと思っていると知って、柱の形になりました。そのような柱状節理は世界の各地にあります。反対に何にもなるのは嫌だと思う原子たちは砂になりました。また、アメリカのグランドサークルには、人間の下肢や手などを形作った不思議な形の岩があります。さらに、世界中の洞窟内には、岩が色々な形になっているものがあります。最近では岩手県の氷渡洞（しがわたりどう）で、サイコロ状の鍾乳石やツボのような鍾乳石もできているそうです。これらはイシカミの原子が目的を持って形になったといえます。また、中世に盛んであった錬金術や賢者の石なども、イシカミの原子が変化することをあらわしています。

【ソラから降りてきたイシカミの変化の色々】



イシカミの姿の代表がオーストラリアのウルル（エアーズロック）で、ソラから降りてきたことを証明するために大平原の真ん中に降りました。クラゲのように足がある形になった原子たちが、固まって地上に降りてきて横向きになります。そのひとつの足がストーンサークルやカルナックの列石のようなものになっていきます。また、足の部分が増殖して、いくつかの連山になります。その連山の、兄弟のような山の頂上の一部がころころと転げ落ちて裾野で集合し、それらが色々相談をして分身の山になっていきます。半円のアサリなど 1 枚貝は、分身がなだらかな山になったことあらわし、タケノコなどは分身が尖った山になったことをあらわしています。尖った山は、活動的で攻撃的な槍をあらわします。







イシカミの分身の巨人たちは、平野を覆っているイシカミを掘り下げて地中海や瀬戸内海を造り、色々な川などを造りました。また、掘り出したものを積み上げたものが、アンデスなどの高い山や、六甲山などの低い山になりました。



イシカミの小さな分身が大きな塊の前に並んで、それから指導を受けて色々なモノになっていきました。そのひとつに、動きやすくて色々な仕事をするのに都合のよい、人間の形に似た“イシジン”にもなりますが、それは後述します。左の画像はイシカミの分身で、大・中・小の岩からなり、思いは持っていましたが何にもなれずに岩のままで固まってしまいました。

【聖なる岩や山】

岩などが今も神聖視されているのは、大昔にはそれらは生きていて、後からあらわれた人間を指導したり、人間ではできない仕事をしたからです。それらがイワクラや聖なる山として大切にされてきました。けれども、思いを持った原子を送り込んだいて座が地球を征服するのではないか、と思った他の星たちが、それに対抗するために、それらの力を封印してきました。それをしたのがあらゆる宗教であり、巨石などの前や上に神社やお寺や教会などを造り、巨石のした仕事を忘れさせるように仕向けてきました。





【イシジンは柔らかなイシカミの一部を切り取って石器を創った】











初期のイシカミの柔らかなシリコンの原子の固まりは、粘土のように自由な形にできました。思いを持ったイシカミの原子たちは、自ら形を決めてイシジンにインスピレーションで伝えて、その形にしてもらいました。それで原子たちはしっかりと結合することができ、なめらかな石刀や石棒、丸いすり石などの色々な石器になりました。最初から石が硬かったら、このような形にはできません。“矢じり”と言われている小さな△は、原子から見た山の形をあらわしています。使用方法の不明な色々な石器は、そのような形のイシジンが思いを持って存在していたことを知らせています。これらの石器は、硬くなってからもうひとつの目的でもある、後から出現するイシジンや人間が使う“矢じり、石包丁、ナイフ型石器、石棒”としても使われました。石包丁や石ナイフは、色々なモノを創るために柔らかなイシカミの体を切り取るのに使われました。石棒などは、切り取った柔らかな塊の一部を伸ばしたりして、石器を作るためにも使われ、その後は動物の皮なめしなどに使われました。イシカミが固まってしまってからは、黒曜石などを割ったのを石器にしたのもあります。黒い岩は支配星が、石器は人間が石を割って創った、と思わせるために協力した悪者のイシカミともいえます。

イシジンは平らで窪みのある石器と、その窪みでものを潰す石器で、木の実などをすり潰して水を加えて、イシカミから出なくなったお汁の代わりに飲んでいました。

【ストーンサークルはイシカミの塊の一部が残ったものである】





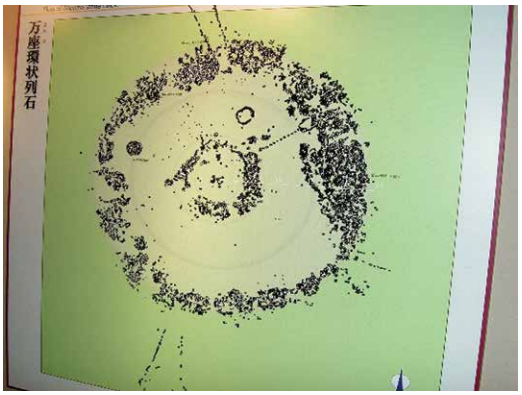


色々な石が円を描いているストーンサークルは世界中に見られますが、その目的はわかっていませんでした。残されているストーンサークルは荒野や砂漠などにあるのがほとんどで、人があまり住まない地域です。大きな石は動かせませんが、畑を作って耕作をするのに小さな石は邪魔になるので､横によけるとそれはサークルの形ではなくなります。すなわちストーンサークルは世界中にもっとたくさんあったとも言えるのです。

思いを持った原子の塊のイシカミがそこに降りてきて、形になりたい原子だけが残って石になり、その他の原子は分解してサークルになりました｡それがストーンサークルのでき方です。初期の頃には､ストーンサークルになっている石は自然の形の石であっても思いを持っていて、中心に向かってエネルギーや知恵を与え、後述の人間誕生という大きな仕事をしていました。



秋田県の大湯環状列石など小さな石が集まった大きなストーンサークルは、遅れて降りてきた子供のイシカミたちで、グループになって大きな円を作り、権力者のイシキを持った人間を創ろうとしました。小さなストーンサークルでは小さな小人のイシジンが創られました。



【目のある石や石柱は思いを持っていることを伝えている】



自然石で目などがあるように見えるものは、それが思いを持っていることを一生懸命に知らせています。けれども思いを持ったイシカミの原子が色々なものの元になっていたことは、自然石だけではすぐに人間に忘れられることがわかったので、次は目のある岩になりました。そしてさらに目のある柱になりました。ヨーロッパに無数の石柱が、建物と関係なくあちこちにあるのは、それらはかつてイシカミの分身として、イシジンや人間を見守っていたのです。



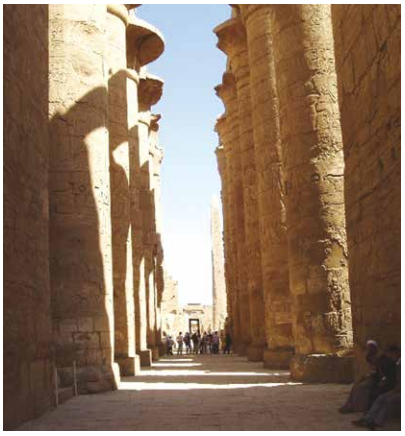




ヨルダンの石柱群ですが、海外にはこのような石柱が列を成しているのが多くあります。これらは柱の状態を見れば、石柱は屋根を支えるものでもないということがわかります。また人間が造ったのであれば必ず使うノミの跡があるはずですが、それは決して見つかりません。







石柱列の前をイシジンや人間が通ることで、エネルギーや知恵を与えていたのです。石柱が思いを持っているものだということを、エジプトやヨーロッパなどの人間の形をした石柱であらわしています。エジプトのヒエログリフが描かれている石柱は、このような物質になったという記録として残しています。



【山になったイシカミがどのようにして石柱や石造建築物になったか？】



パルテノンの柱をあらわす雲 (2009 年 9 月)
この頃ギリシャ調査の計画を立てていた。



山になるような原子の塊がどのようにして建物になったか？　それを思わぬことに雲で知らせてくれました。雲も原子の固まりですので、思いを持っています。このようにひとつの塊が柱に変化し、黄金比の建物になったのが、いわゆる神殿と思われているものです。長方形の建物はシリウスの指導の元に形創られました。

ヨーロッパなどで建物とは関係なく無数にある石柱は、地下のイシカミの塊の一部から、丁度“巨大ミミズ”のように長いものになって外に出てきた姿です。自らの意識で突き出てきた石棒は、大理石に変化し自ら立ち上がりました。そして巨大ミミズが抜け出た跡は、後述の地下水路となりました。イシカミが宇宙から降りてきて最初の頃は、柱の中まで大理石に変化することができましたが、次第にそのエネルギーがなくなってきました。そして原子の塊は次第に硬くなって、色々なモノに変化する超能力がなくなっていきました。





ヨーロッパなどで無数に見られるレンガは、基礎となる原子をあらわし、壁やアーチ型、柱などになりました。柱は円柱、四角の柱、ねじれた柱など色々な形に変化していますが、レンガだけでなく大理石のように変化していきました。レンガがなぜ大理石に変わるかというと、まず臼のようなものに、何になったら良いかわからない砂状のイシカミの原子たちが入り、原子たちをすり潰し粉にします。今は石ですが、当時の臼はロボットと同じで自ら移動することができました。粉になった原子たちは、自ら飛んで行って石柱の土台の部分を覆いました。そして粉になった原子たちは、レンガの石柱の頂上を目指して増殖することで、きれいな大理石の石柱になったのです。それらが風雨にさらされてレンガがむき出しになっている柱や壁が、ポンペイやベネチアのいたる所で見られます。ベネチアで沼の上に創られたという大理石の建物の土台の木や大理石は、イシカミの原子から変化したものです。



このイタリアのバラバラな材料のアーチは、原子たちが自分たちのなりたい石になってアーチになり、原子が目的を持って自分たちのなりたい形や色になったことを知らせています。

またヨーロッパの石造建築の大理石の床はカラフルで、曲線の模様や細かい文字などで少しの隙間もなく、完璧な模様でできています。これらの模様は人間が大理石を削っては決してできません。それはその建物になったイシカミの塊と、シリウス、そしてこのような模様にしたいという星が、色や形でイメージをして床に送ると、その原子たちがイメージそのままに変化していきました。けれどもそのままでは平らにはならないので、絨毯を織り上げた後きれいにカットするように、原子と会話ができる分身のイシジンたちが、床を叩いて平らにしたものが、現在も残されている大理石の床です。２０１１年８月に、長く尾を引くカナ床に似た長い雲が度々出現して、叩いて平らにすることを知らせてきました。









階段状の雲



地上のことをソラに伝える雲

【イシカミの原子は思うとおりの生物になることができた】





思いを持ったイシカミの原子たちは、同じ目的を持った原子同士が結合して色々な山や岩になりましたが、原子は思うとおりの形や色や機能をもつ生物にもなることができました。それは多種多様な生物を見ると良くわかります。それは星たちが、このようなモノになりたいというイメージをエネルギーと共に送り込むと、地球上ではそれを受けてその形になろうという原子たちが集まって、形としてあらわすことができました。それができるのが、この水の惑星の地球だけなので、地球は宇宙の究極の希望の星でもあるのです。軟らかくてワラビモチのようなシリコンの原子が固まれば、普通の石や岩になるのはわかるでしょうが、どうしてその岩になるものから生物が発生したのでしょうか？　それは地球に降りてきて海に沈んだシリコンの原子たちのうち、分解して海の藻屑となったものの中で、もっと地球に残りたいという思いを持った原子たちが変化したからです。シリコンの原子が分解して海のゆりかごの中で海水に漂っていると、太陽が「今のままいると死骸になるだけだから皮を破って変化すると面白いよ」と語りかけ、太陽が紫外線を送り細胞になることができました。なぜなら紫外線が当たると火傷をします。その火傷を治そうと原子たちが増殖することで、どんどん新しい形になれることを原子たちは学びます。そのようにしてシリコンの皮を破った原子たちが、同じ目的を持って集まることで、藻や小さな植物プランクトンになり、次に動物プランクトンになりました。そしてさらに、もっと動ける大きなものになろうと思うものもいて、色々な生物になっていきました。それらは自然に突然変異でなったのではなく、シリコンの原子と星たちがどういう形、色、作用などができるかを相談して、いろいろな生物になっていったのです。

それとは別に、分解することなく山や岩になった原子の中に、ジーッとしているだけなのが嫌だと思うようになったシリコンの原子もいました。その岩のシリコンの原子が何とか違う原子に変わりたいと願うことで、岩に生える藻になって、魚やウニなどに食べてもらうことにより違うものに変化していきました。海の砂漠と言われる地域には岩がなくまっ平らで、そこにはほとんど生き物がいないようで、岩などがある所に色々な生物が住んでいることでも、岩から生物が生まれたということとつながります。

また、なぜ、水H_2Oの中で最初に生物が発生したかというと、Hが手をつないだ形、Oが輪になった形なので、同じ思いを持った原子たちが、手をつないでなろうと思う形になりやすいからです。原子たちは気の合ったもの同士で並び、ある原子たちは内側に回ろうとしました。何度か内側に集まろうとすることで、ラセンができいろいろな形になりＤＮＡとなりました。ＤＮＡの形ばかりでなく、コケや桂藻などを顕微鏡で覗くと、そこには自然にできたではすませられない、目的を持って形になったとしかいえない形や機能が見えます。

【イシカミの原子は驚異的な増殖力があった】



イシカミが降りてきた形は、半円のクラゲの形として山や岩で知らせています。その原子はクラゲの形で降りてきただけでなく、クラゲのように“驚異的な増殖力”がありました。その原子は親と同じ形と機能を持って増えていくことができ、その驚異的な増殖力がいろいろな形の岩や、石の建造物の分身を生み出しました。地球の初期には、想像を超えるエネルギーがあったので、粘菌が増殖するようにイシカミの原子たちも増殖することができ、巨大なものになることができました。それが現在の技術で製作が不可能とされている、いろいろな巨石遺跡などの謎の答えです。そして最近のエチゼンクラゲの異常繁殖は、イシカミがこのようにして降りてきて増殖したことを知らせています。石が生き物のように増殖するのは、とてもゆっくりですが子生まれ石として知らせています。ルーマニアでは、今でも次々と増殖している石があるようです。

石畳や水道橋や万里の長城などは、イシカミの原子たちが最初の形を真似して、競争して増殖しできあがりました。スタートし始めた頃は同じ形に似せて増殖することができましたが、伝言ゲームと同じで元から離れるにつれて、それぞれのイシカミの思いもあって次第に形が変っていきました。それが特に良くわかるのが万里の長城で、人間がたどり着けない山頂にまで伸びています。スタート地点では戦車も通る幅広の城壁ですが、次第に細くなり、最後は土と藁になっているのもあります。万里の長城は、それらも含めて約２万ｋｍに渡り造られています。





石畳の道路は地中海沿岸だけなくヨーロッパ中にあり、無数の石が敷き詰められ、２０００年経っても自動車が通れます。これも最最初に創った形を真似して、思いを持った原子たちが競争して延びていったのです。シチリア島の山上の町の石畳は細胞をあらわす形で、隅々まで敷かれています。

石造りの水道橋は地中海沿岸、トルコなどにもあります。スペインの石積みの水道橋は高さが２８．５ｍもあり、チュニジアの水道橋は１４１ｋｍもの長さがあります。



当時は今よりはるかに少ない人口なのに、現在の水道量よりはるかに多量の水がどうして入用だったのでしょうか？　人間が大変な思いをして、わざわざ水道橋を造ったという理由が全く見当たりません。

ヨーロッパの高層の石造建築や後述するピラミッドも、同じく原子にどんどん上に伸びるように指示を出したので伸びていきました。一晩で造り上げたというお城や教会、インドの巨大な井戸など、世界中の神話や民話となっているものも、思いを持ったイシカミの原子が増殖して変化していくことで、現実に造られ形になっていったものです。

イシカミが元気なうちは増殖していきましたが、何千年も同じ形でジーッとしているのが嫌になった原子たちは、反対に色々な形で原子に戻ろうとしています。山崩れや沈没穴なども原子が手を離すことでおきますが、小さな球形になって少しずつ分解していくのもあります。アメリカのホースシューベンドという場所で見られた、細かくなって分解していく粒状の石ですが、イシカミが間違って降りた火星でも同じようなモノが見られます。





左上の写真の丸石はとても小さいですが、原子が手をつないで丸くなった巨大な岩で、同じようなものに、奈良県山添村などの丸石、中米コスタリカの丸石などがあります。

【オーブとは、思いを持った原子が緩く結合した塊】

奈良県山添村の丸石は、思いを持った原子たちが緩く結合してオーブになって、ペルシャからここに飛んできて着地したものです。そして原子たちは固まろうという思いを集中することで、固く固まることができました。この丸石の他にもいくつもオーブとなって一緒についてきたものがあり、それらも固まりましたが、他のものは小さかったので爆破されました。

(オーブとは、はっきりとした形はないが写真に写る球形のもので、思いを持った原子が緩く結合したもの)



【前方後円墳などもイシカミの原子が増殖してできた】





大阪の大仙稜（仁徳天皇稜）や履仲天皇稜と呼ばれている前方後円墳などでは、明治時代に天皇の力を強めるために、無理に天皇稜と名づけられました。人口も非常に少ない青銅器の時代の２５０年間だけで、人力でこのように巨大なものを次々と造れたでしょうか？　また、奈良にも密集した大和古墳群があります。古墳時代にだけ一斉にたくさんの墳墓が造られています。耕作できる表土はとても薄いと言われているのに、食物を作り出すのに貴重な土をはがしてまで、これらのたくさんの古墳を造るでしょうか？

これらができた時代はまだイシカミの原子が増殖をすることができたので、山のようなイシカミの塊から抜け出した原子たちは、手をつないで水を求めて粘菌のように移動していきました。それで前方後円墳には、小さな手のようなものがあるのです。イシカミの原子たちが抜け出た跡が鍾乳洞と呼ばれるものになりました。特に奈良に古墳が多いのは、奈良盆地はかつて海だったので増殖しやすかったからです。

他のモノを支配したい思いや、崇められたい思いを持った原子たちが多く集まって、そこから権力者になりたいイシジンがたくさん出てきたのです。仁徳稜は大仙稜とも言い、名前の通り鳥取県の大山から移動してきたイシカミの分身で、奈良のモノに対抗しようとしたのです。より力のあるイシカミの原子の集団が、頭と体をあらわす丸と四角が合体して巨大な前方後円墳になりました。そしてあまり大きくない集団が円墳などになりました。そしてその中の原子たちが、石室などに変化して、その中でイシジンを創りあげたのです。塚を覆う葺石（ふきいし）はイシカミが柔らかくてドロであったので、流れ落ちないように外側の原子たちが固めて保護したのです。前方後円墳は日本に多いですが、ヨルダンのネボ山の山城や、スフインクスなども上空から見ると、前方後円墳に似ています。

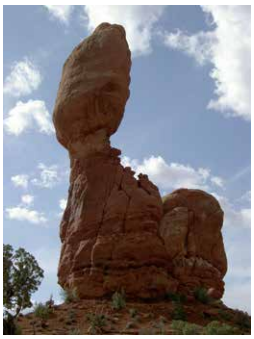




【イシジン（石人）の誕生】

宇宙から降りてきた山のように大きなイシカミは、大きすぎて自由に動けなかったので分身を創りました。そしてそれらはいろいろな仕事をするのに適した形の分身になろうとしました。また、イスや舟などの形にもなって自ら移動したりしたので、これらが岩絵やモザイクなどに描かれた、人間の想像をはるかに超える形のものになりました。

最終的に一番動きやすいように進化したのは、ヨーロッパの街中にもたくさんある生きているような人間の形の石像で、石の成分の“イシジン”になりました。この人間の形になるまでにはイシカミたちは色々試行錯誤したようで、アメリカのグランドサークルには、そのことを知らせる不思議な岩がたくさんあります。頭部、腕、股関節を含む下半身（デリケートアーチ）や、手など骨格を岩で創って、他の原子たちに教えていたようです。







左から、頭部と胸部で子供を背負っている。中央は下半身で、指まであり、人間に壊されないように断崖絶壁の上にあり、そこから少し離れた所でダルマ状の分身が、その作品を見ています。右は手です。目をあらわした岩はいくつもありますが、人間は見える世界のことしか信じないのが分かっていたので、片目がわかりにくくなっているものもあります。

《小休止》

イシジンの後に人間が誕生しますが、その人間の器官も岩であらわしています。左上は気管支と食道をあらわす岩です。右上は胃をあらわし、いずれもアメリカのグランドサークルにあります。また、左下は背骨をあらわす宮崎県の青島の鬼の洗濯岩、右下は同じく宮崎県にある心臓をあらわす岩です。



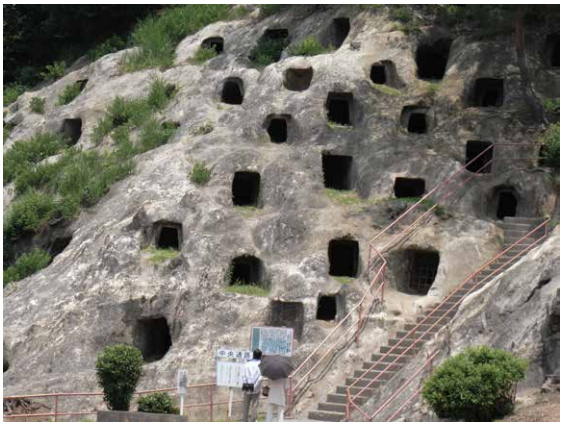


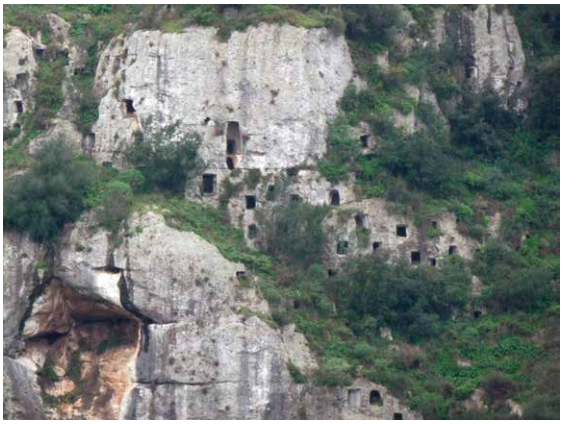




【初期のイシジンは山になったイシカミから抜け出して形になった】

題名の通りに、柔らかなイシカミの体からミミズのように抜け出した分身が、いろいろなモノになりました。ミミズは節がつながった形ですが､分身のひとつひとつの節が思いを持っていて、それらが相談して、望みどおりの形になりました。山などから抜け出して出て行った跡が、地下室や横穴や洞窟、鍾乳洞などになり、その洞窟が大規模になったものがトルコのカッパドキアや、地下墳墓、石窟群などです。埼玉県の吉見百穴古墳群などは岩をくりぬいた穴で、中はベッド状になったのもあります。たまに骨が見つかっただけで墳墓と呼ばれていますが、たまたまそこで人間が最期を迎えたり、後年お墓として利用されただけなのです。





人間が住めるような場所でなく、たどり着くのも困難な断崖などの場所で、わざわざ石を削ってお墓にするでしょうか？　シチリア島のパンタリカ遺跡には、切り立った断崖絶壁に５０００もの石室があり、その石室からは巨大なピン留めが見つかっています。その断崖の岩穴には、羽の生えたイシジンが住んでいたのです｡初期のイシカミは柔らかくワラビ餅のようであったので、羽のあるイシジンはそれを食べながら自分の部屋を造っていきました｡それが高所にある石室で、仙人や修道僧が修行をしていたと言われています。世界各国で見られる石室の中には、このようなベッドがあります。一方で、抜け出たミミズのようなイシカミの分身は、ミミズの節々が原子をあらわすレンガの一つ一つになり、ヨーロッパなどで良く見られるアーチを形成しました。





【イシジンは古墳の中で創られた】





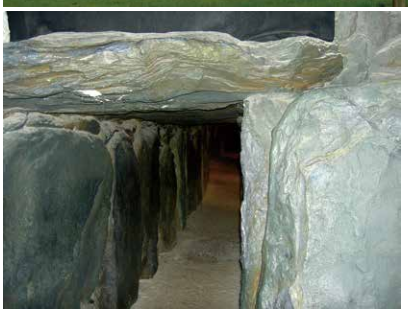
兵庫県北播磨古墳

山になったイシカミたちは、長い年月で自分たちが思いを持っていることを、自然の山の形のままでは忘れられると思ったのと、より効率的にエネルギーを集められるようにと、半円の形をした塚などになろうと思いました。古墳時代に一斉にたくさんの塚ができたのは、そのような同じ思いを持った原子たちが集まり、古墳となったからです。洋の東西を問わず、半円はクラゲのように宇宙から降りてきたいて座のイシカミをあらわし、その入り口などの長方形はシリウスをあらわします。塚の中の石で覆われた石室は、イシジン誕生時の子宮の働きをしました。石室はイシジンを送り出そうと、強い意志を持ったイシカミの原子が、石の部屋に変化しました。残されている石室の多くが巨石で覆われているのは、より強い思いを持った原子たちが浮遊してたくさん集まり、所定の場所で巨石に変化して結合したからです。それで持ち上げる機械のない時代に、到底人力だけでは覆うことができない巨石で覆われ、周りも石で固められているのです。石室の突き当りには、多くの場合羨道より広い部屋があり、中央に三角の形の巨石が立っている場合が多いのは、それはイシカミの分身をあらわしています。

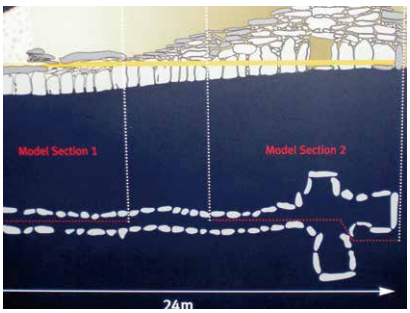


その奥の突き当たりの空間で、イシジンになって自由に行動をしたいと思う原子たちが結合し、イシジンが誕生しました。まだ結合が充分でない原子たちは、続いて石で囲まれた羨道（トンネル）を通りぬけて外に出ます。そこを通り抜ける間にエネルギーや色々な知恵を与えられて、しっかりと結合して知恵のあるイシジンになりました。





アイルランドのニューグレンジは約５０００年前に造られたとも言われている巨大な円墳です。巨石のトンネル（羨道）を２５ｍも通り抜けます。これと同じような、お椀を伏せた塚に羨道のある古墳は、日本、ヨーロッパや南インドの巨石墓、イラクのウル、中国、朝鮮など各国で見られます。いろいろな形の塚の中で、さらに石室や石箱に変化していく場合もありますが、お椀を伏せたような形になっただけのものもあります。



【イシジンは石箱の中でも創られた】

イシカミたちは、地上に降りてから次第にエネルギーがなくなってくると、ヨルダンにあるように石柱列のサークルの中で人間型のイシジンを創り、石柱からエネルギーや知恵を与えていました。けれどもさらにイシカミのエネルギーがなくなり、石柱列や石室だけではイシジンが創れなくなったため、さらに原子の結合を密にした石箱の中で創るようになりました。石箱は世界各国にありますが、後年は棺の代わりにされたり、エジプトなどではイシジンがそのままミイラになったのもあり、人間が作った棺と思われていますが、骨の入っていないのが多いのです。石箱は原子たちが自らの意思でその形となり、その中でイシジンになろうとする原子たちにエネルギーや知恵を与えていました。石箱に立派なものがあるのは、権力者になりたい原子たちが集まって、その思いを実現しようとしたからです。石箱で蓋のあるものもありますが、石が固まってからではとても重くて簡単には持ち上がりません。けれどもイシジンを創っている当時は、石箱の原子たちが結合を緩めることで、自ら簡単に浮き上がり蓋を開けることができたので、イシジンは外に出ることができました。石箱の中で創られた半イシジンの中には、イシカミのエネルギーがなくなってそのまま残って固まったもの（ミイラ）もありました。大理石の湯船のようなものも、イシジンがその中のお汁の中で生まれたので、キリスト教は洗礼として真似をしました。





エジプトとローマの石棺



仁徳天皇稜の巨大な石箱には取っ手がついていますが、人力では到底持ち上げることができません。この蓋はモモンガのように飛んでいたイシジンで、自ら蓋になりました。すなわち突起の部分が手足であったイシジンです。本体の箱も縦向きになって移動をしていた箱型のイシジンで、横になって石箱となり、その中で権力者のイシジンを創りました。



中国のものは遅くなるほど精巧な模様が描かれ、家のような巨大なものに変化していきます。この石家型の中で権力者のイシジンを創りだして、陣地取りのゲームをして体を動かし、イシジンの体が固まらないようにしていました。

【遺跡や石像は原子たちがイシカミの中でその形をすでに作っていた】



シチリア島の劇場型遺跡は、イシカミの中で形として残る原子と、分解する原子がいたことでできあがりました。イシカミの中の原子に形がイメージで送られ、原子たちは指示されるだけでその形になりました。



石像は外から彫ってその形になったのではありません。イシカミの塊の中で石像の形になりたいものが、原子と会話ができるイシジンの彫り師に頼んで、その形で掘り出してもらうことでできました。イシジンの生きているような表情、血管や爪、薄い布の流れるようなひだ、その布の下の身体の線などを、人間が石をノミで彫ってあらわすことは到底できません。このような石像がヨーロッパには無数と言って良いほどたくさんあります。それらは畑や海の中から突然出てくるのもあります。生きているような完璧な石像も、その作者はほとんどわかっていません。



天使が一晩で造ったという巨大な建物や岩の井戸、英雄が一晩で造ったと言われている城などの伝説が世界各国にあります。それらも同じく原子が自ら形に残るなり、手を離して消えていくなりして、イシカミが形に残しました。それらは今でも人間業では到底できない形として残っています。

ミラノのドゥオーモなどのような石造建築に、たくさんのイシジンが付着しているのがありますが、尖塔の上のイシジンはその塔の一部がイシジンの形になって固まりました。あたかも飛んできて休んだようなイシジンの石像もあるのは、そこから飛んで行って、戻ってきて最期にそこで固まったのでしっかりと接合できているのです。



【イシジンは浮いたり飛んだりして移動することができた】



イシジンは前述したように、原子の結合がゆるいと軽くて浮き上がって移動することができました。羽根のあるイシジンはおなじみの天使たちで、羽を鳥のように使って飛ぶことができ、たくさんの石像が残っています。また、天女の羽衣、僧侶の頭の布、一反木綿のお化けは、イシカミのお汁を湯葉のようにして布を作り、それをまとうことで浮きあがることができました。そして高い所に移動できるので、人間が使うにはあまりにも高い所に住居がありました。寺など宗教施設の多くが山の上にあるのも、イシジンが生活をしていたからです。ギリシャのメテオラもそのひとつで、イタリアのパンタリカの断崖絶壁の石室もそうです。人間では到底築くことができないと思われる、険しい山の上に築かれた山城や墳墓といわれる石室などは、このように飛ぶことのできるイシジンが住むための建物や石室でした。



カッパドキアやペトラの壁の穴などには足を引っ掛ける跡がありますが、人間にはその跡は全く利用できませんが、飛ぶことのできるイシジンがそれを使用していました。原子の結合がゆるいイシジンは、あまりに軽すぎて地面にじっと留まっていられないために、長い尻尾のようなもので木などに固定していたようです。イタリアなどの遺跡にそのことがモザイクとして残されています。





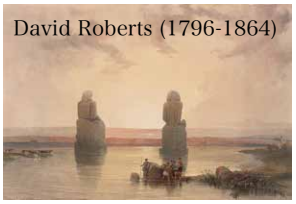
トルコのカッパドキアの洞窟の、小さな天使が座っていたところでは、天使の羽のこすり傷がたくさんあります。このことは、かつてはイシカミが柔らかかったことを物語っています。

【イシジンは水（お汁）で生きていて排泄をしなかった】



イシジンはイシカミの成分が溶けた水だけで生きることができました。それはアメリカのグランドサークルへ行く道中にあった、鏡餅のような白い岩で知らされました。そしてその白いものが溶けたものが“お汁”で、イシジンのエネルギー源です。それで多くの遺跡は川のそばにあって氾濫したときに水を得たり、湖などのそばにあっ たりします。そして足を水に浸すことで毛細管現象で水を吸い上げていたことを、水の中のメムノンの巨像で知らせています。





その他にイシジンは柔らかな親のイシカミの身体の穴に、その角もどきの先端を差込み、ミツバチが蜜を吸い取るようにお汁を吸い取っていました。エジプトでは尖がり帽子のようなお汁のツボを被っていますし、カソリックの司祭の帽子、日本の烏帽子はお汁をためていた名残りで、ちょんまげは角もどきをまとめたもののなごりです。それで岩絵には、世界共通の角もどきのある人物らしきもののイシジンの絵が残されているのです。そしてその後、二本の角もどきを頭蓋骨に押し込めたものが脳になりました。



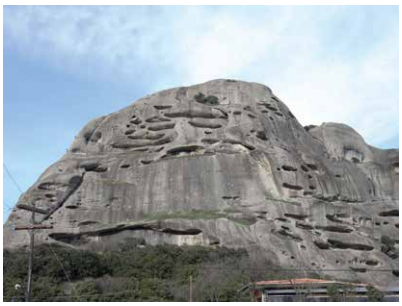
その後イシカミのお汁が次第に出なくなり、イシジンはイシカミの成分が溶けた水を口から飲むようになりました。それでたくさんの急須型の遺物が出てくるのです。壷にお汁を貯めるために、たくさんの壷が世界中に残されましたが、最初の頃は壷を頭に直接ひっつけたイシジンになりました。次第に壷と頭は離れて、イシジンは壷を頭に乗せて運ぶようになりました。壷の底は壷が生きている時は乳首のようでしたが、固まってしまうと水を通すことなく、人間が使う壷の役目をしました。





日本にも壷の遺物は多いですが、国内外を問わず、壷は底が平らでなくなく尖っていて、そのためにそのままでは床に置くことができません。人間が水やお酒を入れるために造ったのであれば、安定が良いように底を平らにするはずです。それはイシジンが頭に乗せて、底になる部分が帽子の先端になったからです。各国には巨大な壷の遺物が残っていますが、伝説に出てくる想像を越える大きさのイシジンがいたということです。ポンペイには大人用の哺乳瓶がたくさん残っています。





また、山や岩になった原子の固まりはワラビもちのようでした。中東地方などの岩山では、かつてそれらの石が食べ物でマナと呼ばれていましたが、やがてただの石になりました。ヨーロッパなどの遺骨で、口の中にレンガが入っているものがあります。左の写真は、柔らかかった頃にイシジンが取り出して食べたので穴の空いたギリシャの岩山です。

イシジンの食べ物はお汁やマナだったので排泄物がなく、トイレはいりませんでした。国内外を問わずお城やヨーロッパなどの石造建築にはトイレがないのは、その建物に最初は排泄をしないイシジンが住んでいたからです。そして日本の長袴や十二単やヨーロッパの豪華なドレスなどは、排泄するには適していないことでわかります。イシジンたちは口から摂取するようになってからお汁の味の変化をもとめたので、まずお酒にして飲むようになったのがヨーロッパのぶどう酒であり、エジプトのビール、日本のお酒などでした。けれども次第にお汁だけでは楽しみがないと、口からも味わって食べることができる人間を創ろうと、星たちは知恵を出し合いました。

【イシジンは超能力でいろいろな形になったり、食べ物や金属も変化させた】



イシジンの特徴のひとつは、原子の結合を自由に変えることができたので、原子が望むとおりに変化できました。動物の特徴を取り入れた人間の形になった動物イシジンや、羽が生えて飛ぶこともできる天使などにもなりました。そして錬金術で金や宝石に変化させることや、水がぶどう酒になったり、水を湧き出させたり、食べ物を出現させることなどができました。イエスの奇跡とされている、一匹の魚をたくさんの魚に増やすことができたのも、原子に同じものになるように指示をすることで増殖したので、魚が増えたのです。水をぶどう酒に変えるのも、水の原子にぶどう酒のようになれと指示をすることで変化したのです。イエスや空海、天使、などの聖人はイシジンであったので、奇跡のような行動をしたことが伝えられています。





高い場所にある山城などにも必ずと言って良いくらい井戸があり、あちこちに聖水の泉が湧き出てくるのも、イシカミの身体の原子に、地下の水路とつながるような穴を開けるように指示をしたからです。空を飛んで移動したり、水の上を歩くことができたりしたのは、身体の原子の結合を緩めることで浮き上がることができたためです。また、ジョーゼットや羽衣のような薄い布をお汁から作り、それを身にまとうことで浮きあがることができたのは、その布の原子が浮きあがろうとしたからです。



イシジンは水さえあれば動くことができましたが、動かないと体が固まるので運動は必要でした。その運動のためにコロッセオや劇場型遺跡の階段で運動をしていましたが、もっと大掛かりなものは陣地取りの戦いをして、運動やスリルを味わっていたのです。神話や伝説などに伝えられている人間では到底無理な戦いは、イシジンは食べ物もいらなく水だけあれば戦えたからできたのです。イシカミの分身としてのイシジンの兵士は、その思いを持った原子が結合するだけでたくさん生まれました。そして武具や刀もイシジンが指導することで、その原子が変化することができました。体を切られてもイシジンは痛みを感じず血も出なかったので、人間の戦争より悲惨な状態にはならなかったのです。生きているような石像や兵馬俑の兵士などは、動いている時はもっと水分を含んで大きかったのですが、水分がなくなって原子の結合が密になって硬い石像などになりました。



中国の兵馬俑は８０００体ともいわれますが、それらは皆表情が違い、中が空洞でセラミック並みの強度です。それは三国志を知った始皇帝が同じように戦わせて楽しもうと、イシカミの原子たちに声をかけたのが、兵士などの形になりました。けれども折角形になっても、イシカミの固まる時代になっていたために、動くことなく形になっただけで終わったのです。錬金術で金などに変化させることもできたので、豪華な遺品が残されました。

【岩絵やモザイク画などの模様はイシカミの存在を知らせている】



世界各地で見られる有史以前の岩絵は、人が住めない砂漠や、人間では到底届かない高い絶壁などに描かれているものがあり、それは人類の前に文明を創った存在がいることを伝えるためでした。そしてそれらの岩絵には、現実に実在する動物や人間とは思えないような形が描かれています。それらは地球に降りてきて何かになりたいと思っている原子たちに、このような形になるようにと星から知らせるものだからであり、そのため人間とは思えない形になったのです。そしそのことを空気中に充満している原子たちが、伝言ゲームのように連絡し合い、地球上の離れた所の原子たちにも伝えるので、離れた場所にも似た形のものがあらわれたのです。

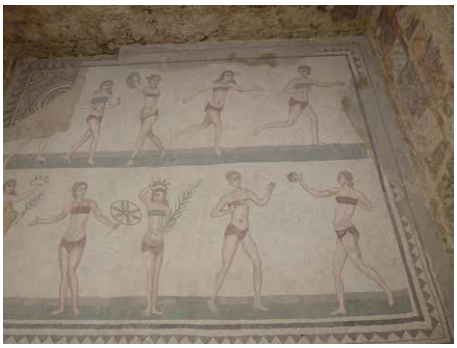
また、岩絵が日光や雨にさらされて描いた絵が消えないように、上から柔らかなイシカミが蓋をして、真っ暗な洞窟の中に保存したのもあります。それは人間がそのことに気づくまで保存されるようにという目的でなされたのです。岩絵の渦巻きは宇宙の始まり、三角は争い好きなイシカミの分身をあらわします。



アフリカの砂漠の中にスイマーと呼ばれる岩絵がありますが、それも人間でなくイシジンの原子がゆるく結合していて、浮遊していたイシジンをあらわしています。岩に手形が吹き付けてあるのは、イシジンとして手を使うようになったことを知らせています。人間とは程遠い姿が描かれているのは、いろいろな形の分身のイシジンがいたことを岩絵で知らせています。ナスカの地上絵が空から見ないと形がわからないのは、宇宙から降りてきて何になったら良いかわからない原子たちに、このような形になりなさいと知らせています。原子が風に運ばれてその情報を伝えるので、世界各国で同じような形の動物が生まれたのです。ナスカの地上絵の手だけの模様は、手だけのイシジンがいて、細かい仕事をしたことを知らせています。



岩絵やモザイク画に度々出てくる舟形の模様は、イシカミの原子たちが長く連なっていることをあらわしています。そしてその船が自ら動いていたことをシチリア島のモザイク画であらわしています。その舟には頭があり、底には繊毛のようなものが描かれています。モザイク画が色の違うタイルを細かくして模様を描いているのは、形になっていた原子が分解して、再度タイルになり形を残したためです。モザイク画では動物などがたくさん残されていますが、何になったら良いかわからない原子たちに、このような動物になりなさいというのと、それの狩りをして食べ物を得るようにという教科書なのです。



イシジンの原子たちが形の記憶を持ちながら分解してモザイク画となりましたが、タペストリーや絨毯も同じです。曼荼羅の絵もそして更に細かく離れたのが、絵画となって残っています。ルネッサンス時代の絵などは原子と会話ができるイシジンの画家によって描かれました。それで涙などを本モノのようにあらわすことができるようで、ミケランジェロの「絵は筆で描くのでない」という言葉が残されているのです。半身が壁にうずまったイシジンは、同じイシカミの原子たちがそれぞれの目的を達成し固まりました。それはイシカミの原子たちは、建物にもイシジンにもなっているということを、半分建物で半分イシジンになって知らせています。エジプトや中東の遺跡で浮き彫りの模様になっているのも同じで、形になっていたものが壁に入って固まり、模様を浮き出させています。



【アトランティス大陸はイシジンの究極の文明で栄えた】





今でこそ海になっていますが、日本海や地中海はかつては草原でした。そして地中海になった地域は恐竜の墓場だったので、その骨で白い石灰が多い地域となりました。その地域を海にするために、想像を絶する数のイシジンの巨人が、草原になっているイシカミに沈むように号令をかけてまわりました。地中海にはイタリアやギリシャ、小島が残りましたが、それはかつての文明を残すためでした。それはまた、人類が進んでいくであろうことをイタリアの長靴であらわし、人類が苦難の道を歩むことをシチリア島の小石につまずくことで知らせています。シチリア島は別の意味で、長靴をはく文明の先に栄えたとも知らせていますし、イタリアでありながらローマ時代より以前の文明が栄えたことも知らせています。



ギリシャも同じく長靴の形になる計画でしたが、ギリシャに降りたイシカミの原子たちには指導するものがいなかったので、好き勝手な形でばらばらの島々になりました。けれどもアトランティスのことを小さな遺跡（デルフィー）にして残しておきました。その他、地中海近辺やヨーロッパなど各地に降りたイシカミの原子たちは、いろいろな文明を発達させていきました。



アトランティス時代は地球が平らであり、水の幕が地上を覆っていて、雨や嵐はなく適度な湿度で気温も丁度で、イシジンたちは歩くことなく少し浮上をして移動ができました。いて座の意識のイシカミの原子たちは、シリウスの知恵と共に、想像しうる限りの最高の作品になり、究極の形をあらわす文明を築き上げました。けれども外見をいかにすばらしく美しくしても、外見だけの美には限界があると気づきました。それは本物そっくりな果物の陶器でも、色も香も味もないのでは、いくら形が立派でも飽きてくるということです。また、地球上では思うことが具現化できる、ということを知った支配したいと思う星（支配星）の思いがイシジンに入り込みました。そして理想の国のアトランティスを、欲と争いの大陸にしてしまいました。それが後期アトランティスで、大きなイシジンが小さな分身をたくさん創って、支配者と被支配者に分かれ不平等な国となり、支配される側には不満が満ち溢れていきました。最高傑作の文明であるアトランティス大陸を造っていた原子たちは、その不満が極限に達したこともあって、分解して形がなくなってしまいましたが、その文明の一部をイタリアやギリシャなどに残しています。

【ムー大陸では何もせず遊んで暮らしていた】

ムー大陸は南太平洋にあり、半分水に漬かった状態の大陸で、ただ地球に降りてきてのんびりと体験したい、というイシカミの原子が具現化していました。ムー大陸のイシジンたちは、水がすぐに手に入るので特に働きませんでした。それを戒めるためと、支配しようとする大きな星が、地球上で形になりたいと降りてきた何も知らないミナシゴの原子たちを連ならせて、ダイジャとして地球に送り込みました。そのダイジャのあまりの数の多さに嫌になり、ムー大陸を作った原子たちは沈没して、小島を残すだけとなりました。そのダイジャを積み重ねていき、それが石に変化したのがナマンドール遺跡の石棒で、半分水に漬かった状態で何トンもの長い石棒が交互に重ねた状態で残されています。



南太平洋にも文明が栄えたということを、イースター島のモアイや、グアム島のラッテ・ストーンや石貨として残しておきました。巨大な石貨と言われているものは、いて座は皆平等なので平らな形であらわしています。また、中央に穴があいているのは、いて座の王や女王の意識たちが地球のために降りてきたので、いて座には残っていないことをあらわしています。

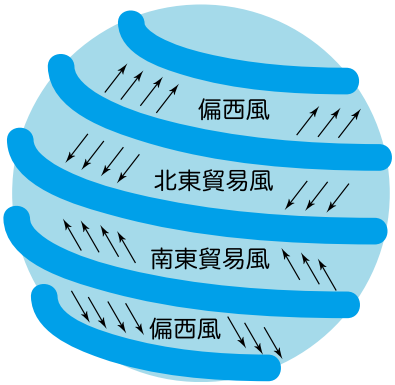
モアイ像はイシカミの原子がカタツムリのように少しずつ移動して海辺まで来ましたが、それは水を求めていたのです。また、仲間のイシカミたちが海に沈んでしまったのを見送っていましたが、そのうち固まって動けなくなってあの形で残されたのです。

ムーのイシジンたちのように働かないことは良くないと、日本では「南にムーはなかった」と言う意味の「南無」や「宗像＝ムーはなかった」という、仏教のお経や宗像（むなかた）神社など宗教で徹底してムー大陸の存在を封印してきました。そのためにムー大陸を創った原子の意識は、強力な集合エネルギーの台風として抗議をしてきました。その台風の大波をオーストラリアのウエーブロックや、モーニンググローリーの雲で知らせてきました。



南太平洋のナンマドール遺跡は、巨石の石棒が何重にも積み上げられています。原子の小さな集団のミナノコたちが、連なってダイジャとなって悪さをしに押し寄せてくるので、ムー大陸の巨人がやっつけて積み上げていったら、石棒になったということです。

【風や台風も思いを持っている】



赤道周辺の貿易風は北半球では北東貿易風、南半球では南東貿易風になっていて、それぞれから吹いてくる向きが違うのは、地球は赤道部分で半分に分かれていることを知らせています。すなわち南半球では南東から北西に向いて吹き、北半球は反対に北東から南西に向かって吹きます。一方偏西風は大陸のイシカミたちが、いて座の女王が降りた日本へ行きたいという思いで、西から東に向かって吹いています。貿易風が両半球で東から西に吹き、偏西風が反対に西から東に向かって吹くのは、同じ方向に吹いていると地球が太陽系の仲間からどんどん離れるのを防ぐためです。

原子の中には固められて自由にならないことが嫌で、そこから外に出ようとする原子の子供をニウ（ニュートリノ）と呼びますが、これも“思い”を持っています。あまりに小さくてニウはたくさん集まっても物質にはなれません。けれども原子たちは原子から飛び出した子供のニウたちを連絡役にして、お互い交信をしています。それで原子たちは地上から発信されたことを、見えない風や嵐、雲、大雨などで表現します。それが台風や竜巻などです。

色々な原因でＳＯＳの思いを発した人が大勢集まると、その人々の原子から指令を受けたニウたちは、連絡しあって大きなＳＯＳの思いの塊を宇宙へ発信します。それでその SOS に気づかせようと、空や地球に充満している原子たちが行動を起こすので、いろいろな災害になるのです。また、台風は太平洋に沈んだムー大陸のイシカミたちが、地球に最初に降りたいて座のモノたちがいる日本へ来る、ということでもあります。ソラから知らせてくることが現実の台風の進路と合っていることが度々あり、台風も思いを持って進んでいることがわかります。（台湾の周りで１週間滞在したり、急に進路を変えて上陸したり、列島に沿って進んだりすることです）

２０１２年８月の台風１４号は、太平洋上で急に９０度進路を変え、その後は一回転してから朝鮮半島を目指す進路を取りました。そのことは、当時の朝鮮半島の政治情勢をソラは見ていて、思いを持った原子の集合体である台風が進んでいったそうです。

【巨大地震は見えない彗星の落下とイシカミの膜の継ぎ目の大きな振動で起こる】

２００４年のスマトラ沖地震はＭ９．１で、巨大な津波で大きな被害がありました。これは見えない彗星が落下したことで起きたと伝えられていますが、巨大な海水の渦巻きがそれを知らせています。インドネシアではヘビを神としてあがめています。そのことが嫌なので、その地の人々の潜在意識が宇宙に助けを求め、彗星を呼び寄せたようです。（18 ページの下の写真参照）

また、いつまでたっても平等の地球にならないために、宇宙では３・１１の東北地方太平洋沖地震で平らな地球に戻そうとする計画が立てられました。それで地球を包み込んだ膜の継ぎ目が離れようとしたが、人類にとってあまりに悲惨なことになることがわかったために、平らに一気に戻すことは中止されました。けれども、いつまでたっても地球を形成している原子たちが意識を持っていることを認めず、人間たちが争いばかりしているため、人々の潜在意識は宇宙に助けを求めるので、今後どのような計画が実行されるかはわかりません。

【人間はストーンサークルの中で誕生した】

アトランティスでイシジンたちが物質文明を極限まで発達させながら、希望がなくなり自滅したのは、石の作品ばかりでは変化することがなく、退屈だったからでもありました。けれども全てを原子に戻してしまうと、せっかく発達させた文明を伝えていくことができないので、動物のように子供を生んで、自分たちの子孫を残す計画を立てました。それで動物より賢くて、これまでの文明を継承できる人間が誕生することになりました。この情報を知らされる前は、人間はサルから進化したものと思っていましたが、ビジョンと遺跡の写真で思ってもいないことを知らせてきました。



有珠山の裾野で深く火山灰で守られた小さなストーンサークルの中（左の写真）には、小さな土偶が置いてあり、それが人間誕生と関係があると、かすかな言葉で知らせてきました。
そしてビジョンなどで次のことを知らせてきました。

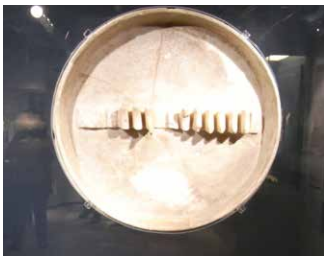
それはまず人間型イシジンであったもののうち、人間に生まれたいと思う原子が一旦分解しました。そしてストーンサークルが創られ、その中にイシジンの形の記憶を持った原子たちが集まります。すると周りの石たちからエネルギーや知恵が与えられ、同時に星たちの知恵と何本もの稲妻のエネルギーが宇宙から送られてきました。特に太陽のエネルギーが必要で、赤い稲妻も降りてきました。そのエネルギーをもらうことで、イシジンの記憶を持った原子たちが再結合し、やがて人間の肉体が創られました。



ストーンサークルの中に小さな土偶が置かれた状態で発掘されたのは、北海道だけでなく他の地にもあります。ストーンサークルは世界中にありますが、現在残されているのは耕作に適しない土地や砂漠などにあります。ストーンサークルが創られていても、小さな石は耕作のために移動してしまえば形は残りませんし、小さな土偶も人間が持って帰れば、ただの子供の玩具になります。そのために有珠山のイシカミは火山を噴火させて、分厚い火山灰でそれらを守ってきました。小さな土偶は国内外の博物館で見ることができますが、残念なことにそれらがどこからどんな状況で出土したかがわからないのです。

エジプトの石のタライ様のものやシシリー島のこの遺物は、この中にイシジンの記憶を持った原子たちが集まり、これが回ることで人間の肉体が創られたと伝えられました。このシシリー島の遺物は原子が並ぶことを知らせています。世界各地に降りてきたイシカミの原子が、伝言ゲームでどのようなものを創るか知らされて、砂漠であろうがジャングルであろうが、それぞれの場所でイシジンは創られました。





けれども食べ物からエネルギーを得る人間は、その生まれた場所で食べ物を得ることができなければ人間として生きられませんので、イシジンが生まれた全ての場所で人間が創られた、という訳ではありませんでした。それで人間が住めない岩ばかりの所や険しい断崖などに遺跡や岩絵があり、人間以外の文明があったことを知らせています。かえってそのような場所だったので、イシジンの文明が残されたともいえます。また、遅くにニュージーランドに降りたイシカミは、人間は支配星に網でつかまれて悲惨な思いをしていると思いました。それで亀甲模様の丸石を地球にたとえて残し、人間にはならないで鳥だけを創りました。



【ミイラはイシジンから人間に変わる過程で亡くなったもの】

遅くに降りてきたイシカミのイシジンは、これまでのように分解してその原子たちが上手に再結合して人間になる、ということがうまくできませんでした。イシカミの原子たちが、しっかりと手をつないでくれなかったからです。それでイシカミのお汁で包帯を作り、形になるように巻きつけていたのですが、イシカミのエネルギーがなくなり、そのまま創りかけで亡くなったのがミイラです。

ミイラは臓器を取り出して防腐剤を詰めて包帯で巻いて作られたとされていますが、その反対なのです。防腐剤は再結合に時間がかかったので入れられました。壷の中に臓器が取り出されたのでなく、壷の中で臓器が創られ、それを半イシジンの肉体に入れようとしたのです。エジプトのパピルスで死者の書と呼ばれているのは、「日のもとに出現するための呪文」と訳されるように、地下や石室で創られたイシジンが外の世界に出るための指導書です。死後の世界を書いていると言われていますが、これも反対なのです。原子が形を整えて固まることができると、口開けの儀式をして言葉を教え、心臓を入れてもらって、外の世界で人間として働くことを教えている教科書です。死者の書では最後に農作業をすることで終わりますが、死後の世界で畑作業をすることはありえないからです。また、ミイラでも自然環境の中でなったものは、人間として生きていたものが、色々な条件でその形として残りました。

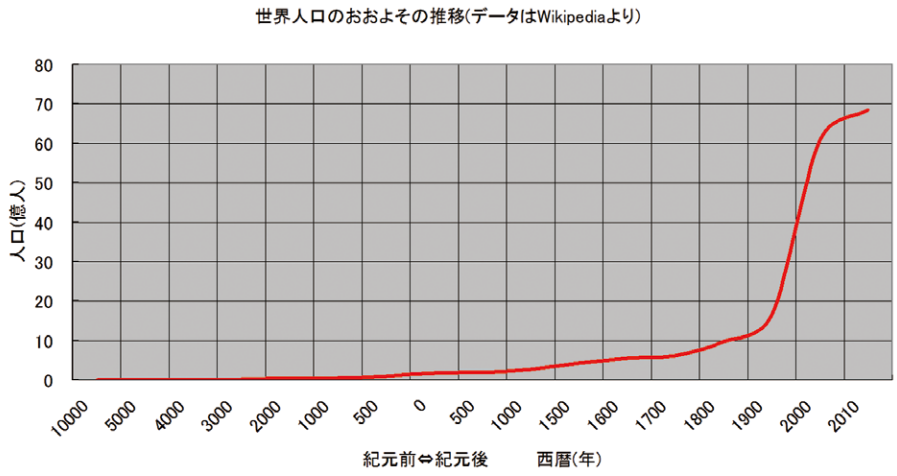
半イシジンは、イシジンから人間に移行する過程で、その両方の特徴を持って生きることができる者と言えます。古代の絵や像などで、女性が赤ちゃんを抱いているものは、どのような人種であれマリア像のように言われています。けれどもあれは、イシジンでありながら半分人間の赤ちゃんを生んだことを褒められているのです。

【人間は星の知恵で進化したのであり、自然に進化したのではない】

下の表は世界人口のおおよその遷移です。四大文明発祥の頃の人口は色々な説がありますが、世界中で１．６億人位とされています。それゆえに、ひとつの文明で４０００万人としても、それが広い土地に分散すると、とても少ない人口であったでしょう。そして、やっと労働ができる大人になっても、その頃の寿命は想像もつかないほど短かったでしょう。それなのにローマ帝国は、数百年のうちに地中海沿岸は勿論、イギリスからイラクまで占領したとされています。そしてこのように少ない人口で、現代の建築技術でも不可能なローマ式の石造大建築物（コロッセオなどの競技場、水道橋、劇場と呼ばれる階段式広場、広大な入浴施設など）を各地で短期間に造ったとされていますが、現実に少ない人間で建築できるでしょうか？　これは、この時期に各地に一斉に降りたイシカミたちがお互い連絡しあって、イシジンが暮らすのに必要な建物を造っていったので、似た建築物になったのです。

旧約聖書には、神は土で人の形を作って、それに息を吹き込ことで人間ができたと書かれていますが、各国の神話でも人間は土や泥から作られたという物語は多く、世界中に似た物語や伝説があります。神が人間を作ったとされているのは、初期の人間はあまりにも動物と同じようだったので、神話は人間を教育をするために創られたものなのです。その物語の中には、巨人、ソラを飛ぶ舟、大洪水、土を食べる、山や岩が動く、天使や天女、一夜でできたお城や大きな井戸、小人、いわゆる怪物や妖怪とされているもの、動いていたのに岩になったなど、それらの奇想天外な話もイシジンを当てはめると、現実に存在していたといえます。

人間はサルから進化したとする進化論で、生物は全て偶然に進化したとされていることや、アフリカのカップルが世界中に広まったというのはとても無理があります。ちなみに、アフリカ原人などの化石は、人間は猿から進化したと思わせるために、支配星がそのような化石を創りだしたとも伝えています。現在でも交通の遮断されたアマゾンのジャングルの中で、石器時代のような生活をする民族が発見され、絶滅の危機にさらされているくらいです。また、民族が寒暖の差の激しい地方を通って世界中に広まることは到底考えられません。人間はサルから進化したのではなく、サルはシリウスＢＣが人間を真似して送り込んだ動物です。



【初期の人間はイシジンに比べてとても弱かった】

人間はイシジンと違って、いろいろな体験ができるように、五感を得る肉体が創られることになりました。というのは、お汁だけ飲んで長生きしても変化が得られないので、色々な体験ができるようにと計画されたからです。まず、五感のひとつの食べること、味覚の楽しみを持ちたいと思いました。それにはイシジンと違って、口でおいしさを味わって食べ物を食べて、そのことでエネルギーを得ることができるような人間にしようと思いました。その過程のひとつが、エジプトの像で見られる顎の下の管です。イシジンはお汁だけで生きることができましたが、人間は食べ物を食べて、それをエネルギー源にするにはとても困難でした。それで口から食べてエネルギーを得る動物たちを送り込んだ星たちの知恵をもらいました。







イシジンから人間になることはとても困難でした。なぜなら、イシジンの能力のない人間になるのを、イシジンだった原子が嫌がったからです。それはなぜかというと、人間はイシジンに比べてとても弱く、寒かったり痛かったりと、生きていく上で苦痛を伴ったからです。それで肉体を形成した原子たちは、早く分解したいと思い、すぐに死んでしまいました。特にヨーロッパでは狩猟を教え肉食から始めたために、人間が独立して成長していくことが困難でした。それでヨーロッパのあちこちにある石像のイシジンに面倒をみてもらったのです。肉食では食べてもすぐに排出しなければならず、トイレも必要になりました。また、人間の肉体には毛皮がなかったために保温ができず、そのためにイシジンたちは人間のためにお風呂を創り暖めていました。このようにヨーロッパのイシジンは、新たに生れた人間を指導するために、神やその部下として指導したために、世話になったイシジンを神話として残しています。



ちなみに、なぜ人間には動物のような保温のための毛皮がないかというと、髪の毛は頭上の星も意識を持っていることをあらわし、腋毛など隠れたところの毛は地下にも意識を持った存在がいることを知らせるためです。

【イシジンは人間を指導した】



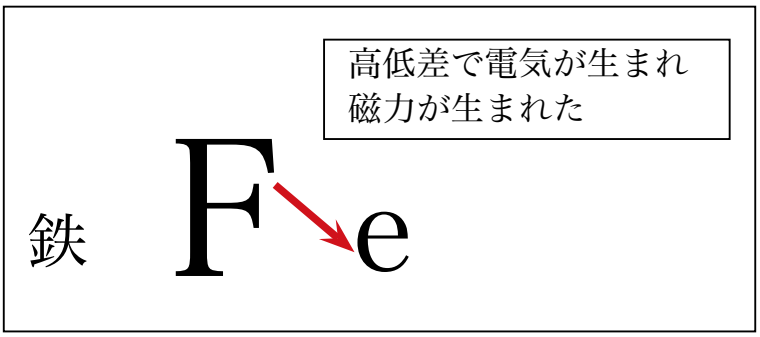


ヨーロッパなどに対して日本では、イシジンは早くから人間の肉体に変化して生活をして、その排泄物を上手に利用して畑で食べ物を作っていました。そして食べ物を粉にして水を加えて、お汁に似たもので栄養を取って、次第に固形物にならして自然に排泄できる人間が創られました。それが縄文人といわれる人たちでした。縄文時代の土器の縄の模様は、小さなものが繰り返す模様です。それは権力者がいなくて、皆同じという平等をあらわしています。けれどもその後、次第にその模様がなくなっていくのは、弥生時代には他を支配しようとする支配者があらわれ、平等とは程遠くなったからです。初期の日本で人間として生きる知恵は、形のないもの（意識体）が教えていたようです。埴輪や銅鐸や銅鏡は、かつてはそのようなモノがいた、という証拠を残すために作られました。それらはイシジンの一種とも言え、それらもいろいろな知恵を人間にテレパシーで教えていたのです。埴輪が墳墓と言われる塚で見つかるのは、それはイシカミが親なので、イシカミが固って最期を迎えるときに親の元に行ったのです。銅鏡も人間を指導するもののひとつでしたが、その後支配する星がリュージンなどをそれに入れて、人間を支配していきました。そして、その銅鏡を崇めさせて支配し、ヨーロッパと同じ様になりました。

人間の誕生に関して、詳しいことは弊社刊【ソラの人間誕生記】をご参照ください。

【磁力と重力の発生】

地球を固めたイシカミの原子たちのうち、ヘリウムから変化したＦは、スモールｅと一緒になって鉄Ｆｅになりました。鉄のＦとｅは高低差で電気が流れ、次第に大きなエネルギーとなり、磁力が生まれて地球は巨大な磁石となり、あらゆるモノを引きつけるようになりました。そして重力が生まれました。初期の地球には重力はありませんでしたが、酸素Ｏやチッソ Ｎや水素Ｈの原子が充満して生き物を抑えていたので、無重力状態にはなりませんでした。初期の地球は平らで重力が小さかったので、恐竜たちは巨大化しても軽やかに活動ができました。そしてイシカミの原子たちも自由に動くことができ、巨石や石像が動いていたという情報にもつながります。



火山噴火の時は、地球の原子の塊が一斉に地球の外に飛び出します。その原子は発電をしているので電力を放電したことになります。反対に雷は宇宙から地球に電力を注入します。地球が平らな時にもイシジンや人間を創るためにたくさんの稲妻（原子が一斉に駆け降りる）が地球に降りてきていました。

【争うばかりの恐竜は大量の稲妻で絶滅し、その後は家族愛の動物が創られた】

星たちが地球上に自分たちの想像しうる限りの生物を送り込み､にぎやかな地球となりました。地球の初期は平らだったので、地球上はどこでも均等な気温の温暖な気候で、北極や南極も生き物が繁殖していました。それで南極に恐竜の化石、北極圏でミイラ化した森が残り、マンモスの化石がシベリアから出てくるのです｡そして地球にはたくさんの酸素や窒素が充満していたので、植物も動物も伸び伸びと大きく育ちました。星たちは自分たちが送り込んだ恐竜を、より強くさせようと、より大きな恐竜に変化させました。けれども生き抜くという動物の本能ばかりの動物を送り込んだために争いが絶えず、より強い恐竜だけが生き残り、宇宙の希望の星とは程遠い地球になりました。そしてあまりに恐竜の争いがうるさいので、地球が頭を上げたことにより、地球の地軸が傾きました。

恐竜の殺し合いばかりの地球を見て、宇宙の大元は自分の分身を創り、地球上に無数の稲妻を一斉に送り込んだので、恐竜は全て絶滅してしまいました。その稲妻は白いオーロラのような巨大な稲妻でした。特に恐竜が多かったヨーロッパ地方では、恐竜たちは最後は今の地中海地方に集まり集団で滅んだために、そこは石灰分が多い土地となりました。そして、後年その土地がイシジンにより大西洋に運び込まれて、アトランティス大陸を形成します。

その後、大元は強いばかりの巨大な動物でなく、家族愛を大切にする小型の動物を送り込むように星たちに指示をして、小型の動物たちも地球上で繁栄するようになりました。

【地球はゆで卵のようで、地下空洞や川などがあり、地球の中心にマグマは存在しない】

地球はゆで卵のようで、殻は外側の地殻をあらわし、その下の白身はお汁が固まったもので、黄身は 粘土質で南北の地球を接着させています。そして地球のまん中に細い縦型の筒が北極から南極につながっているのは、地球が息をするためで、ゆで卵の真ん中に細いストローを通したようなものです。地下空洞はイシカミが協調しあって創り、それを火炎土器の模様であらわしています。それらは北半球に多く、南半球は少ないのです。最近、北極海やアフリカ沖のアガラス渦などで、これまで観測されたことのないような巨大な渦巻きが報告されています。渦巻きは海底に向かい、岩盤で海水がろ過され、地下空洞には真水が流れているのを、滝観洞など洞窟内の滝や川などなどで知らせています。その濾過されたきれいな水が、砂漠の地下水や、ヨーロッパやロシアなどの噴水、世界各地での多量の湧水や泉などになって地上に出ています。





いろいろな形の火炎土器があるのは、それぞれのイシカミの情報の受け取り方が違うからです。取っ手と呼ばれる部位は、地下空洞への入り口ということですが、現実には地下に入ることはできません。静岡のうなぎ井戸など深さのわからない穴や、年中冷気が吹き出ているという空洞なども、地下空洞につながっています。大阪藤井寺の石の太鼓橋の丸みは地球をあらわし、欄干は雲を、下の川は地球の中には、海水が濾過された水が流れている川があることを知らせています。

最近、ネットで紹介されている、川の水が突然なくなり、むき出しになった岩の間を魚が動いているのや、大きな池が見る間に地下に流れ込んで干上がったり、世界各地で起きている巨大な陥没穴などは、地球の地下には空洞がたくさんあるということとつながります。各地で巨大洞窟が次々見つかっているのも、地球の地下が同じようになっていることを知らせています。そしてチューリップの花は地球の中に空洞があることを知らせています。

地球の真ん中にマグマがあると言うのは、火山からマグマが吹き出たり温泉が出るのでそう言われていますが、深海の温度は１０００ｍくらいで急激に下がり、３０００m以下では１．５℃と一定です。深度１万mにもなればマグマにより近づいて温かくなるはずです。ところが、ごく一部に熱水が出たり、ごくまれに海底火山が噴火するだけです。火山が噴火するのは、周りのイシカミと仲良くできない孤独なイシカミが、その不満の思いを外に噴出するからです。そして吹き出たイシカミの原子と酸素とが結合して不満の思いを燃焼し、高熱の赤い溶岩になって流出するのです。溶岩は必ずしも真っ赤で高熱でないというのもあります。アフリカには黒い溶岩湖があり、その泥状岩は真っ赤な溶岩より温度は低い、という火山もあります。ただ、ポンペイを埋めたベスビオス火山などのように、イシカミの文明を保存するために、分厚い灰を降らして噴火するのもいました。

【連なったイシカミたちが抜け出た跡が噴水の水路となった】

二千年前に造られたと言われるイタリアの“ヴィルゴ水道”は、２４mもの螺旋階段を降りると、人が通れるくらいの幅の地下水路があり、深さ１mくらいもある豊富な水が流れています。水源には３～４カ所の豊富な湧き水があり、これらがローマ市内のトレビの泉などの水になります。この情報の“海の水を濾過して地下空洞の水になったもの”が来ていると言えるのは、雪山のないローマの夏は乾燥が激しいけれど、噴水の水量はあまり変わらない、ということでも言えます。湖が水源だととてもまかなえない水量であり、何よりも飲用になるミネラルウォーターがたくさんの噴水から絶えず放水されています。中近東のカナートのような地下用水路は、中国や北アフリカでも見られますが、イシカミの原子たちが筒状に抜け出たものの跡が、地下水路になったのです。



【地球を希望の星にするために、協力をする原子たちが集まって太陽系ができた】

前述したように地球の塊が最初に出現し、それに対して地球を宇宙の希望の星にするために太陽系が創られました。それらもそれぞれの惑星の目的を達せようとする、思いを持った原子の集まりでできています。

《太陽》

地球を希望の星にするために、光りと熱を与えようという思いの原子が、阿蘇山と九重山のイシカミから飛び出し増殖して大きくなりました。増殖する途中に、熱と光を出すためにプルトニウムの原子に変化していきました。太陽の炎がなぜ熱いかというと、太陽はプルトニウムの石の星で、プルトニウムが燃えて気化するからです。プルトニウムは２つの働きをしようという思いを持っていて、一つは石に戻ろうとする働きと、もう一つは石から蒸発しようとする働きです。それでプルトニウムは燃えても無くならずに永久に燃え続け、太陽が燃え尽きることはないのです。プルトニウムの働きをするには、全ての星の知恵とエネルギーが与えられました。

《水星》

不満の思いを燃やし続けている火の星であった地球を冷やそうと思う原子が集まり、水星が誕生しました。そして水星が地球に、水を雨として送り込みました。水は地球上のすべての生き物にとって大切なものであり、人間は水に頼って生きてきました。そのために、他の大きな星座が水星を仲間に引き入れ、リュージンを水の中に住まわせ人間を支配するようになりました。雨が必ず下に落ちてくるのは、水星の目的が地球を冷やすために集まった意識で構成されている原子の塊だからです。(水の誕生については８ページを参照ください)

《木星》

同じく木星も植物を送り込み、酸素を提供したり、いろいろと人間のために働きました。けれども植物が地下に根を伸ばすことで地下のイシカミの不満を聞くことになり、その思いを地上に送ったので、小鳥がソラのものたちにその不満を伝えました。そのことを聞いたいたずら好きの原子たちが、高く上に伸びた木を伝わって地上に降りてきて、リュージンになってイシジンや人間を支配していくようになりました。また、木星の周囲を回っているたくさんの衛星たちが木星からエネルギーを得て、人間を支配していたようです。この惑星の２本の縞模様は、地球が北半球と南半球に分かれていて、その間に地下空洞があることを知らせています。木が高く上に伸びていき、水も高く導管を通って上がっていくのは、木星の意識は宇宙から来たので、そこに戻ろうとするからです。

《土星》

土星は地球に土を送り込みました。土星は小鳥座が作った星で、おしゃれをしたいと、小鳥の羽を真似して輪を創りました。イス座から送り込まれて大きな土星に隠れた衛星のエン・ケラ・ド・ウスは、他のものたちが円になろうとすることをけ散らそうという、イジワルな意識の星でした。

《火星》

火星には地球と間違ってイシカミが降りたために、地球に似た岩などがあります。火星は人間に大きな働きをする火を教えました。けれども人間が火を崇めることで、地球を支配しようとする意識を持った原子が衛星のファ・ボスとダイ・モスとなり、火星からエネルギーを取り、２大

宗教として人間を支配していくようになりました。特にダイ・モスはベガの星が送り込み、隠れて悪さをしていました。かつて火星には水があり、ワカメのような意識体が住んでいましたが、現在は水が地球に去って行ったため意識体はいません。

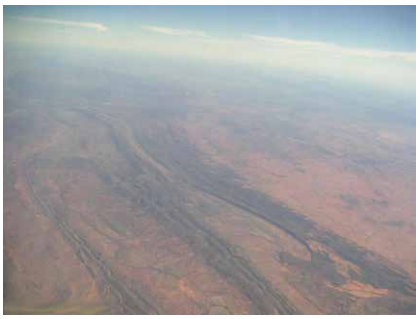
《金星》

なぜ太陽系で金星だけが反対に回っているかというと、地球は自転をしていますが、同じ方向ばかりに回るので、太陽から遠くなっていかないように、金星が反対に回って引き戻すのです。金星は金属の知恵を教えましたが、金色も教えました。地球に近いということで、人間のことを良く知っていて、これも宗教として人間を支配していました。

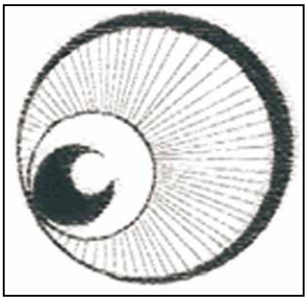
その他《天王星》は、自分は悪くないと主張しているが、なんら地球のためにならずに、地球が平和になるための足を引っ張っています。《海王星》は海の生き物を送り込み、人間の食べ物を与えてくれますが、悪者も送り込み人間社会に影響を与えています。《冥王星》は最近、太陽系から外されましたが、冥王星の王はかつては地球を支配しようとした星の仲間として、死後の世界を支配していました。最近発見された《第１０惑星》は､地球を助けようとする原子が集まってできました。

《月とその誕生》

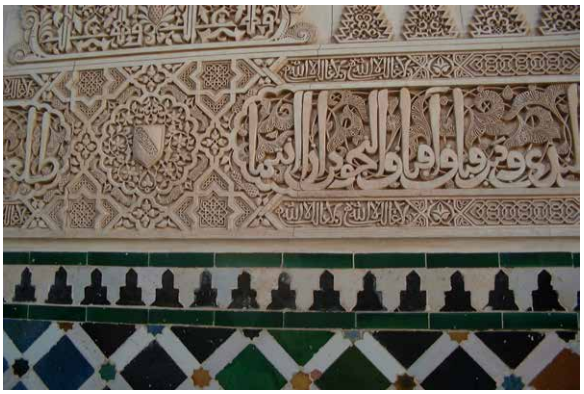
月は地球から飛び出したという学説があります。この情報では、地球が不満の原子の塊の星だということが嫌で、地球を飛び出した原子の塊が月になったということです。その痕跡はオーストラリアのフリンダース山で知らせています。あちこちからこのようにして飛び出した原子たちが合体し、その後増殖をして大きな月になりました。カンガルー島のリマーカブル・ロックという象の形の岩で地球をあらわし、その横の小さな鉄兜のような岩で、地球から月が飛び出したことをあらわしています。兜の形は、月が支配星の基地になり、人間を争わせていたことを知らせています。支配星は地球を支配しようと、地球を見渡せる月に移り住み、月を基地としたのです。そして支配星と同じく地球を支配しようという思いを持った原子が集まり、１９９８年までＵＦＯや宇宙人を送り込んでいたのです。月が地球から飛び出したことは穀物模様（クロップサークル）でも知らせています。左の穀物模様の大きな丸は地球で、小さな三日月が月をあらわし、地球の一部が月になったことを知らせています。キリンは有史以前の岩絵にも描かれている古くからの動物ですが､その長い首で月が地球から飛び出したことをあらわしています。







【古代の建築や装飾の意味】



イスラム建築の外見はとても質素ですが、内部は驚くほど細かで繊細な模様が施されています。これは原子の大きな集団のミナノモノ、原子の小さな集団のミナノコが、シリウスに指導してもらって、このような高度な幾何学が必要とされる模様を描いていったのです。小さな模様はミナノコが、大きな模様はミナノモノがこの模様をあらわしました。



石はノミを入れると、どの方向に割れていくか全くわからないそうです。けれどもなぜ製作者もわからないのに、今にも動きだしそうな石像などが、ヨーロッパやロシアなどいたる所にたくさんあるのでしょう？　それはイシジンが固められることになったので、人類の前にイシジンが存在して文化を築いたことを知らせるために、自分たちの望むとおりの形で固まったからです。人間がノミで彫ったとしたら、その５００ｋｇからの石像を、高い塔の上にどのようにして持ち上げ、地震があるのに１０００年以上も固定できるでしょうか？

古代のすばらしい建築物は、イシカミの原子たちが望む、最高の作品として固まって残りました。建築物として残っているのは、石造や木造に関わらず、人間型イシジンがイシカミの原子たちに指導しただけで形になっていきました。天使や複雑な装飾物は、原子たちが思いを持って形になり、その建物から一旦離れて、それからその建物に戻ってきてくっつきました。それらは世界中の古代の建築物に共通します。



このワカメや丸いモノがフジツボのようになった装飾物は、ミラノのドゥオーモの塔の装飾です。これは石の建築物になった思いを持った原子は、同じく生物にもなっているということを知らせています。その他、国内外を問わず、建物にライオンやリューなどの像がくっついているのは、後から支配星が送り込んだものが、シンプルな建物に次々とくっついて、自分たちに目を向けさせようとしたのです。

【山城の謎】









兵庫県にある山城の武田城ですが、このように形の残っていない山城の跡は日本国中にあります。洋の東西を問わず、山の上にお城などの建物が造られていますが、人間の場合は敵がいつ攻めてくるかわからないのに、険しい山の上まで巨石などを運び上げて、長年かかってお城を造るでしょうか？

山はイシカミで、その頂上部の原子たちが自らお城などに変化し、イシジンの住む建物になったのです。そこはイシジンが住み運動をするためと、退屈をまぎらわすために相手の陣地取りをする目的だったのです。高い山の上にあると、見晴らしが良くて相手の動きが良くわかります。イシジンたちは羽があったり、原子の結合がゆるくて浮遊できたので、人間が登るのに困難を極める高い山でも行き来ができました。けわしい山頂に自然の巨石が組み込まれた石垣が世界各国にありますが、人間では到底運び上げることはできませんが、思いを持った原子が変化したので、驚くほどの巨石が石垣などに変化できたのです。そしてヨーロッパなどでよく見られる、自然石とレンガが密着したお城が、長年風雨に耐えて今でも頑丈に残っています。人間が自然石とレンガを密着させて建物を造ることは、とても困難で不可能と言われています。

シチリア島には、あちこちの山の上に都市が築かれています。なだらかな丘や山は、イシカミたちが連なって長くなって降りてきて、それらの山頂が平らになり、いわゆる山台国（ヤマタイコク）になりました。日本の失われたヤマタイコクも四国にありましたが、支配星に支配されたものたちに滅ぼされて、シ・コク（四国）として封印されました。マ・チュ・ピ・チュは“マ（魔）やピ（プレアデス）”の支配星に“チュ”としている遺跡で、支配星の言うことを聞かないと、このように無人になってしまうと知らせる遺跡です。支配星とは、原子たちが物質化した地球の人間を支配して、自分たちの思うままにあやつろう、と思う意識の集まりの星です。支配星はインカの予言でそのことを知らせて、言うことを聞かないと人類は滅亡すると思わせて、人間を支配してきたのです。

【星のエネルギーとオーパーツ】

星は同じ思いを持つ原子の固まりですが、その思いを集中することで、人間の想像をはるかに越えたエネルギーを出すことができます。宝石なども、その星の強力なエネルギーを地球のイシカミの一点に送り込むことで超高温にして、岩を宝石に変化させます。そして人間がそれらを取り合って争うのを楽しむために、支配星たちがエネルギーを送り込んで創っています。その星の想像を絶するエネルギーをあらわす代表は、メキシコのナイカ洞窟の巨大水晶洞窟です。巨大な水晶が洞窟でできたのは、地球を支配してきた強力なヘビ使い座がエネルギーを与え続けていたためです。

星のエネルギーは、頭骸骨に穴を開けて人間を支配することもできました。私は実際、宝石を大きくしたり、水晶を粘土のように柔らかくして、太くしたり細くしたりするのを見ました。そのように、固い水晶も支配星がエネルギーを与えると、それを柔らかくして水晶のドクロのような形を造ることもできたのです。

オーパーツとは、場違いな場所や年代から出てくる物質のことです。白亜紀の三葉虫のそばにスニーカーの足跡の化石があったり、４億年前の地層から金属のネジがたくさん出てきたなど、考えられないモノが現実に出てくるのは、星が強力なエネルギーを与えるからです。すなわち、星がエネルギーを集中して送り込むことで物質も化石になります。また地層の変化も起こして、年代測定器で測ると、とんでもない年代になるのです。人間の化石で何万年前という古いのが時々出てきますが、これらはこれまで地球を支配してきた星たちが、いて座とシリウスなどが地球を創ったということを隠すために、エネルギーを与えて化石を創っていると伝えてきます。そして人間は猿から進化したと思わせる進化論から離れないようにしている、ともいえます。

星は夜空に無数に見ることができます。当たり前のことですが、思いを持った星たちは昼も夜もいつも地球を見ているのです。それなのにほとんどの人たちは、星は単なるガスや岩の塊で、光を放っているだけと思っています。そして国の指導者から個人まで、隠れて悪いことをしても気づかれないだろうと思い込んで、争いの地球にしています。“おてんとさんはお見通し（誰も見ていないと思い悪いことをしても、おてんとさんは見ている）”という日本のことわざは、本当のことなのです。





【いろいろな謎の遺跡】

1）巨石遺跡

自然石の原子も思いを持っていて、かつてはそれは柔らかくて、原子たちの希望で動いていたということを認めると、巨石遺跡の謎はほとんど解けます。自然石もかつては動いていた、ということは“山すその石たちがトコトコと動いているのや、山頂から塊がコロコロと転げ落ちてきて、それが人間のような形になって動く”ビジョンで知らされました。そして世界各国の神話や伝説でも、石が動いていたという物語がたくさんあります。





ドルメンなどを形作る巨石がどうして持ち上げられたかというと、巨石を形成するイシカミの原子たちが、同じ目的を持ってゆるく手をつないで浮き上がり、下になる岩の上に乗ってから思うような形になり、その原子たちはしっかりと結束して固い岩となったのです。その原子たちは柔らかいうちに固定される位置に収まるので、固くなった後に不安定な形でも、しっかりと固定されているのです。

ドルメンでは、その下の空間で周りのイシカミの原子からエネルギーや知恵などをもらって、それぞれの星が送り込んだ形の動物が創られました。大きなドルメンでは馬や鹿など大きな動物が、小さなドルメンではウサギや狐など小さな動物が創られました。原子たちは岩絵に描かれている動物を見て、自らその形になろうと思うものが結集して、その形になりました。また南米などで、複雑な切り込みの巨石が全く隙間なく積み上げられているものは、その形になろうと思う原子たちが、緩やかな結合で浮き上がり、しっかりと組み込まれてから固まったのです。それらは柔らかく、豆腐が積み重なるように少し膨らみが出た状態で固まったので、複雑な切り込みも隙間が全くない状態で固まることができました。



大阪城の石垣では、この奥の城内で人間が創られました。イシカミの原子のエネルギーが弱まっていたので、このような巨大な石になることによってエネルギーを増やし、人間になる原子たちにエネルギーを送りました。



エジプトでは、人間では到底運べない巨石の土台や、オベリスクが切り出しの途中で終わっているものは、切断面の原子たちが手を離すことで切断するところまではできましたが、それができた頃にはイシジンたちが固まる時期になったので、そのまま取り残されたのです。

2）たくさんの小石や岩の遺跡



アイルランドにもたくさんの巨石遺跡があります。約紀元前４０００年くらいに建設されたというアイルランドのクリーヴィキール遺跡は、無数の大小の石で形作られている遺跡です。上から見ると周りが石の壁に囲まれ、マントを着た巨人のように見えます。これもイシカミの分身の固まりが、石でも意識を持っていることを人類に知らせるために、目的を持ってその形になりました。



門から入るには、まず背を低くして小さくなり、かがむことは謙虚でなければならないということをあらわしています。科学が進歩して人間が一番賢いと思っている人には、この遺跡の謎は解けないということです。



その先の子宮の形をしたのは、人間は子宮の中で育って出てくることをあらわします。そばの大きな岩や小さな石たちにエネルギーと知恵をもらって、イシジンとして出て行くことを知らせています。



門のような巨石の向こうには空間があり、正面には三角の岩があります。両脇の岩に知恵とエネルギーをもらって、前に進むと分身の三角岩がいます。三角岩はイシカミの三角山をもあらわし、山になったものが全てのものの根源ということを知らせています。







フランスのロク・マリア・ケールには、立っていれば世界一と言われる、大きな石棒が３つに折れたものがあります。それはイシカミのことがマリア信仰によって封印されたことを、石棒を筆にたとえて、イシカミが筆を折ったと知らせています。そのそばには無数の小石で巨大な二本のお汁の管をつけ、中央は渦巻き状になったた四角をあらわす遺跡があります。そしてさらに葺石のある石室もあります。

【ピラミッドはイシカミの原子たちが競争して頂上を目指してできた】



エジプトでは巨大なギザのピラミッドをはじめ１００基以上、スーダンのヌビア地方の砂漠の中にはメロエ遺跡やヌリ遺跡などに220基ものピラミッドが数百年の間にできています。メキシコなど中南米の台座式のピラミッドなどはジャングルの中にあり、次々と新たに変形ピラミッドが発掘されています。中国の西安近くでも数百個のピラミッドが衛星写真で確認されたり、ボスニアではギザのピラミッドより大きなものが最近見つかっています。世界の各地で、それも人里離れた所で、同じ時期に造られたというのは古墳と同じで、ソラから降りてきた意識あるイシカミの原子が、色々な形のピラミッドになったからです。



ギザのピラミッドの場合、四角に切り出した乗用車１台分の平均２．５トンの石を、３００万個も狂いなく四角錐に積み上げることは、現代の技術でも不可能とされています。これは２０年で造られたと言われていますが、そうすると２分間にひとつを切り出して積み上げる計算になるようです。ピラミッド建設の記録が出てきたというのは、すでにできていたピラミッドの補修作業のことでした。



ギザのピラミッドがどのようにして造られたかというと、まず、巨大なイシジンがイシカミの原子の豆腐のように柔らかい塊から出るお汁を固まらせて、湯葉のようになった布を創りました。そして柔らかいイシカミの塊の一部をちぎって、おにぎりを創るようにして四角いものを作ったので、ほぼ同じくらいの大きさの四角い石ができました。それを四角に並べ、その塊の原子たちに頂上を目指して増殖するように指示をしたので、そこからどんどんと増えていきました。そのことを指導したのは、四角い岩のシリウスでした。そして増殖している途中で、部屋を作るために一部は増殖を止めました。その部屋から斜め下に、オベリスクを刺して、イシジンが登れるように通路を作りました。そしてその部屋の中に、地上でイシジンを創っていた石箱を置いたのは、ピラミッドを造った巨人の女の子が指輪入れにするためでした。石箱を部屋に入れ終わったら、再び増殖をするように指示を出したので、頂上までキチンと４角錐に積み上がりました。そして、それらが軟らかいうちに上からきれいになでたので、ドロ団子と同じでガラスのように光ったピラミッドになりました。そしてイシジンの巨人は、その後に砂となり姿を消しました。ピラミッドの中の部屋にはじめて人が入ったときに、石箱の角が壊れていたのに、その欠片が見当たらなかったのは、外から壊れた石箱を入れたためです。なぜ壊れたかというと、地上に置かれたその石箱の中でイシジンが創られ



て、イシジンが外に出る時に、柔らかかった石箱につまづいて壊れたからです。ピラミッドの中は真っ暗で狭くて急な穴なので、イシジンでないと登れません。後から取り付けられた急な鉄梯子のおかげで人間は登ることができますが、その横の壁は鏡のようにつるつるで、カミソリ一枚入らないくらいにぴったりと積み上げられています。それはイシカミが軟らかいうちに積み上がっていったので、全く隙間がなくなったのです。人間の通れない細い通路は、ピラミッドになったイシカミの原子のイシキが通る道です。ピラミッドの外側にあるテラスのような広場は、浮き上がって移動できるイシジンが休憩する場所で、イシジンはそこで下界を見下ろしていました。ギザのピラミッドがオリオンの星座と同じ形に並んでいるのは、オリオンからも知恵をもらったからです。ギザのピラミッドには地下通路がたくさんあるそうですが、そこは小さなイシジンたちが行き来していました。その通路は、その部分のイシカミの原子がミミズのように抜け出してでき、抜け出した原子たちはいろいろなイシジンになりました。

メキシコの台形ピラミッドのチチェン・イッツァは、原子たちに乳房に乳汁を貯める方法を教えています。人間の赤ちゃんは乳汁で育つために、体から飛び出した乳房にお乳を貯めることは大切なことですが、原子たちにとっては難しいことでした。それで光りが駆け上がるような設計にして、乳汁が乳房の中に入るように教えているのです。けれどもその光りが駆け上がるのを、支配星はヘビが駆け上がるように思わせたり、ピューマなどの石像をくっつけました。それが嫌だったので、そこのイシカミはイシジンだけを創り、人間は創りませんでした。そして他のサポテクやエル･タヒンなどのピラミッドと同じく、ジャングルの中に埋もれてしまいました。なお、エル・タヒンの階段状ピラミッドは、表面は切り石で覆っていますが、内部は土と荒石で詰まっています。ギザのピラミッドも外はあのような切石ですが、人間の目の届かない部分は、切り石でなく塊になっているとも言います。



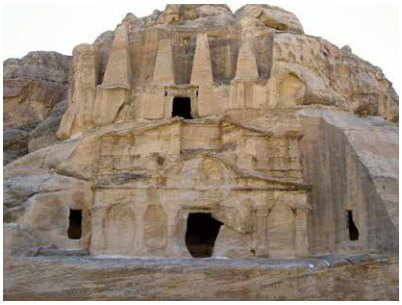
左の写真は先に紹介した《太陽の舟》です。この木造の舟は、砂漠の巨石の下に分解され、きちんとまとめられていました。最近、もうひとつ発見されています。組み立てると４０ｍを越える舟で、船首がとても長いのは、小さなイシジンのこぎ手だけでは進まないので、巨人のイシジンがそこを引っ張ったからです。この舟でイスラエルからエジプトに商売にきたのです。そしてそこで捕まって、ユダヤ人は奴隷とされ、その後放浪の民となったのです。

《スフィンクス》は頭が人間で体がネコのイシジンの巨人で､ネコは支配星が送り込んだモノで､人間を支配していることをあらわしています。

【ペトラ遺跡はイシジンが住んでいただけで人間は住んでいなかった】



ヨルダンのペトラは岩ばかりの土地で、周りには農地が全くありません。神殿跡などの崩壊した石造建築物がたくさんあり、何万人か住んでいたと言われていますが、水もわずかな小川だけで到底人間が住める地域ではありません。建物の中にモザイク画もあり、ローマ式劇場などがあるものの、１８１２年まで地元の人が知るだけでした。そして人間が住んでいた形跡がほとんどないというのは、イシジンが住んでいただけで人間は住まなかったということです。このようなイシカミをあらわす丸い塊の分身が道路の横で見守っているようで、色々な形に少しずつ変化した岩が並んでいます。



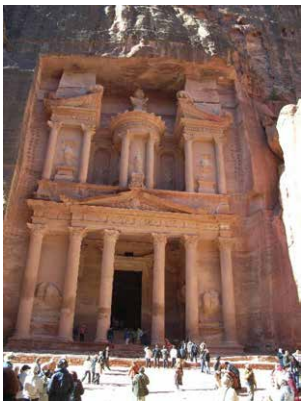
エル・カズネまでの道中にある、このような造りかけのように見える建物や長方形の箱のようなものは、シリウスが教えてイシジンが住んでいました。これはカンムリのようで、カシオペア座が教えた形で、ここに降りて来たことを伝えています。



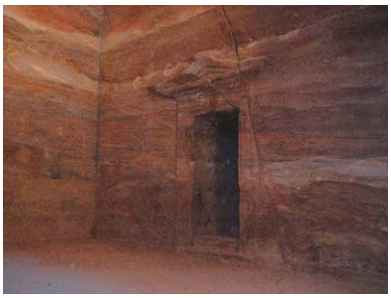
このセラミックのような焼き物の水道管が、岩をくり貫いた低いところや、１５ｍもの高い所に残っています。イシカミはお豆腐のように柔らかく、それが圧縮されると汁が出てきたので、それをこの管に受けてイシジンが飲んでいました。



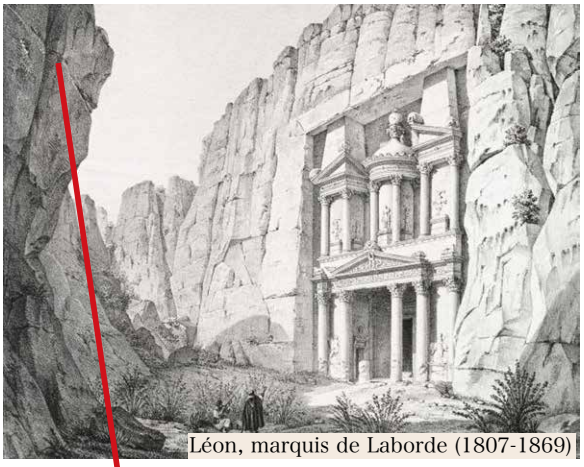
岩の割れ目（シク）の途中に象とサケに似た石像があるのは「陸を象であらわし、海をサケであらわし、いずれもイシカミの原子が生き物になった」ことをあらわしています。また、地球はかつて二つのものが一つになったことも知らせています」　（注：地球は、かって二つの長方形の板状の物体が合体して一つの球体になった）



このシクを通り抜けると、突然視界が広がって広場があらわれます。シクは膣をあらわし、抜けた広場は子宮をあらわし、この立派な建物のエル・カズネでイシジンが集合していました。エル・カズネは巨大な建物で、垂直で頑丈な岩にノミの跡ひとつなく、見事な建物が彫られています。２階に分かれ下段の三角の屋根が地下のイシカミの世界をあらわし、上段の屋根の中央が離れているのは、火山の噴火で飛び出した原子たちが、いろいろなモノになったことをあらわします。

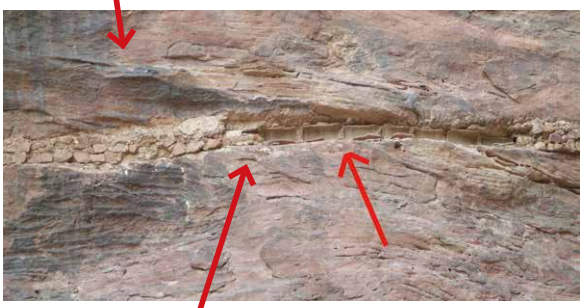


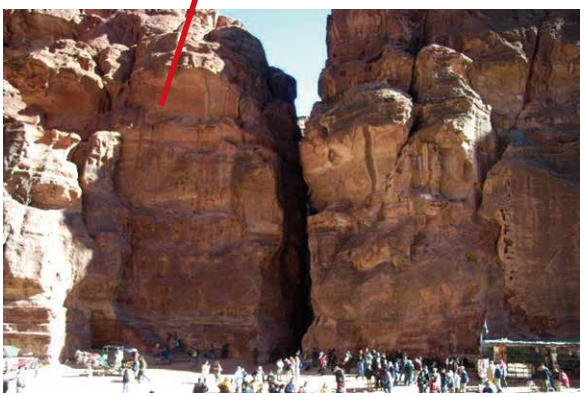
エル・カズネの中には、地下室や周りの色々な岩穴で誕生したイシジンが集まった部屋がひとつだけあります。大きな建物の中はとても高い天井で、中はこの部屋ひとつだけです。つるつるの岩で天井や壁、床ができており、巨人のイシジンが凹部に立って指導をしたようです。また、それらのイシジンがローマ式の劇場型遺跡で集合して、指導を受けたり運動などをしていました。



Léon, marquis de Laborde (1807-1869)

１８００年代のペトラの風景です。人間ならこのような川の水を利用するだけで、このすぐ上の１０m近い高さのセラミックの水道管は利用しません。





このセラミックのような土管は、ペトラの１０m近い高い所にあります。川は下に流れているので、人間であればわざわざそのような高いとこに造ることはしませんし、できません。





【ストーンヘンジはシリウスといて座のメッセージ】



この大きなストーンヘンジは、いろいろな指導をするシリウスをあらわす長方形の岩で、人間は輪になって仲よくすることが大切だということを知らせています。ストーンヘンジのあるソールズベリー平原より数百ｋｍも離れたプレセリ山地の５０トンもの巨石は、親である山のイシカミから分かれた原子たちが、この形になろうとゆるく結合をしながら移動してきて、この地で固く結合したものです。イースター島のモアイも同じです。巨石文明が世界中でいっせいに始まり忽然と消えたのは、この時期にイシカミが世界各地に降りてきて、シリウスといて座が仕事をしたことをあらわすために形を残しました。一対の石柱とその上に水平に渡した石の間は､凹凸を組み合わせて固定されていますが､その後その形は人間の股間節につながっていきます。

【ポンペイの遺跡はイシジンがいたことを知らせるために灰に埋もれた】



ベスビオス火山の噴火で生き埋めになり、その後に取り出されたといわれているポンペイ遺跡の像もイシジンでした。掘りかけていたら石像がでてきたのが、そのまま残されているのがあります。穴に石膏を入れて掘り出されたと言われていますが、このように数ｍの上にあったモグラのような穴にわざわざ石膏を入れるでしょうか？　そして１０００年からその穴がふさがれずにあったでしょうか？　彼らはイシジンが存在したということを知らせるために、この形で残ったのです。一番奥で起き上がって家族を見ているお父さんが、そのことを伝えている家族の石像です。





生きていた肉体が腐敗し溶けてしまえば、歯や頭蓋骨はたとえ穴が残っていても下に落ちます。そして決して口に歯がくっつくことはありません。そのことを賢いイヌは、穴に石膏を流して作ったのでないことを知らせるために、わざとこのような形で固まりました。

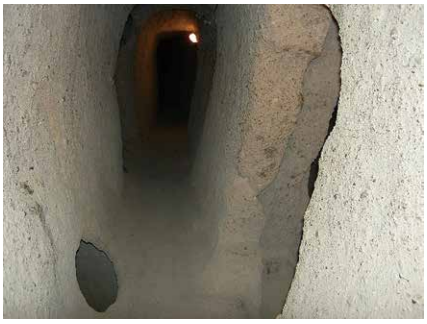


右の写真は、当時のイシジンの飲み物であったお汁と、葡萄酒の販売所です。ポンペイやイスラムのハーレムなどでは、享楽で明け暮れた生活を送っていたと思われています。けれども初期の人間はとても弱くてすぐに死んでしまい人口が増加しなかったので、イシジンたちが人間を保護して、そこで人口の増加を図っていたのです。

【カッパ・ド・キアはイシカミが固まることを知らせたイシジンの地下都市】





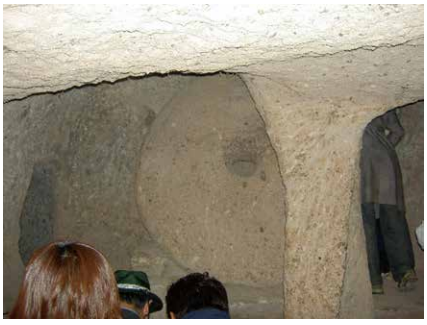


カッパドキアは、１００平方km近くにわたって岩石地帯が広がる台地に、キノコのような形の奇岩が林立したその下にあります。キノコのような岩はイシカミの分身で、岩でも頭があって思いをもっていることを知らせています。

１９６５年に発見されたカイマクル地下都市は、地下８階、深さ５０m以上に及ぶ巨大なものと言われています。たくさんの地下室があるのは、地下でイシジンに変化するためです。イシジンは乾燥すると固まるので、上から水が落ちてくるくらいが良いのです。カッパは頭にお皿がありますが、イシカミが柔らかい時は豆腐のようにお汁が落ちてきていて、お皿でそのお汁を受けていたのでその名前がついています。地下は真っ暗で、明かりがないと人間は暮らせません。たいまつでは酸素がなくなりますし、たいまつのすすも残っていません。イシジンは目がなくても見えましたので、通路にあちこち穴が開いていても平気でした。



この地下深くに伸びる深い穴は、人間であれば到底足を引っ掛けることはできませんが、地下で生まれた羽のあるイシジン（天使）が下から上がってきていたのです。



１トンもの大きな丸石を転がして通路を閉じる仕掛けもあります。これはここからイシジンとして出て行ったら、元の場所に戻れないということを知らせていました。

地下室の壁にはあらゆる所で引っかき傷がありますが、これは天使が羽を動かすことで、柔らかい壁をこすってできたものです。天使のイシジンは、ヨーロッパのイシジンが固まってしまうことを伝えるために、たくさん創られたということです。

【石の宝殿はテレビの形の変化を伝えていた】



石の宝殿は兵庫県にあり、丸い岩山をくりぬいたような空間に、突起のある長方形の巨石がスポっと入ったような形です。この岩ははるか遠くの御位山から歩いてきたイシカミの分身で、同じ成分の石片もあります。側面の縦の窪みは、将来は薄型ＴＶになることを知らせています。



その後ろの突起は、アナログ型のテレビをあらわしています。



そして底はまるで水の上に浮いているように、きれいに切り込まれています。その水は渇水期でも無くならないということで、地下空洞を通って鳴門の渦潮とつながっていることをあらわしています。すなわち鳴門の渦潮が地下に向かって吸い込まれて、そこから地下空洞を通ってここに来ているということです。

【益田の岩舟はソラを飛んできた天の岩舟だった】





奈良の郊外の竹やぶの中にぽつんとある巨石には、きれいにくり貫かれた二つの穴があります。ちょうど人が入れるくらいで、表面は格子柄です。イシカミの分身のイシジンの原子が、結合をゆるくしてソラを飛んで、ここに着地しました。大陸からこれに乗ってきたイシジンは、ヤマトの権力者になりました。格子柄は、この岩舟はイシカミの原子が集まってできていることをあらわしています。神話の天の岩舟伝説はあちこちにありますが、これはそのものずばりで、今でこそ固い岩になっていますが、ソラを飛んできた時は原子の結合が柔らかく、イシジンを運ぶという任務を終えて固まったのです。



【世界の不思議な遺跡の謎】

《イランのペルセポリス》には頭部に装飾のある巨大な石塔がたくさん立っています。その石柱は頭に模様があり、屋根を支えるわけではなく、思いを持った初期のイシジンです。色々な高さの石柱の基礎部分は、大小さまざまなイシジンが座るイスとして創られました。そのイスには各国のイシジンがそれぞれ創った食べ物を持ち寄り、お互いの知恵を分かち合うために、座って話し合いました。大きくて緩やかな階段の壁には、多くのイシジンがいろいろな品物を持っている姿が浮き彫りにされており､そのことをあらわしています。そしてそれらイシジンのまとめ役が、背の高い石柱のイシジンで、高い所から声をかけて誘導していました。そのことを今では高い所のマイクからコーランを流して伝えています。クセルクセス門にある人面有翼獣神像は動物イシジンで、それは牛を送り込んだ星がこの地域を支配していることを知らせています。別の壁には牛に襲い掛かっているライオンの浮き彫りがありますが、それはその後、ライオンを送り込んだ支配星と大わし座がその地域を支配したことを知らせています。この遺跡の近くには、ペトラに似た岩壁に大王の墓と呼ばれる建物が彫りかけてあります。その石室の中でイシジンが創られ、イシジンの浮き彫りとなって、この遺跡の意味を知らせています。



《中国の武帝の茂陵》は茂陵となった小山から、イシカミの巨人たちが天馬に乗ってエジプトまで行ったことを、長い羨道と天馬を残して知らせています。

《北米のメサ・ヴェルデ》はアナサジ族が断崖をくり貫いて造った集落遺跡群です。１４世紀に突然放棄されたのは、イシカミの力が無くなってお汁が出なくなり、断崖では生活できなくなったからです。

《インドの「Chand Baori」》と呼ばれる巨大な井戸は、１０世紀に作られ深さ３０m、１３層の階段は３５００段もありますが、一晩で幽霊が造ったと伝えられています。深い井戸の底は水が貯まっていますが、それはこの井戸の謎の答えに近づくことを知らせています。

《ギアナ高地の陥没穴》はイシカミの原子が結合することを止めたからです。最近世界各地で、突然に陥没穴が発生していて原因不明ですが、それらも同じことです。その他に、イタリアの巨大な岩を丸くくりぬいた深い井戸や、エチオピアの岩の十字架教会も同じことです。人間の手で掘られたのではなく、そこに残る原子だけが結合して、他の原子たちは手を離すことで空間ができ、十字架の形が残りました。伝説では天使が掘ったと言われるゆえんです。

【思い込みを外して】



左の写真は、現代でも原始生活をしていたアボリジニの仮の家ですが、大昔の人も食べ物を求めて一日のほとんどを費やし、家は寝るだけだったと思われます。ましてや亡くなって崩れていく死体を、いかに権力があったとしても、その人を偲んで何十年もかかって巨大な墓を造るでしょうか？　今でも戦乱の土地では、遺体を土に埋めるのがやっとと言われます。ましてや貴重な食物を作るための土地を削ってまでお墓のために小山を造るでしょうか？　植物が育つ地表はとても浅くて２０cm 足らずと言われます。

今でも原始生活をしている民族の人口は決して増えることなく､絶滅の危機にあると言います。ということは、大昔も本当にあらゆる原因で早くに亡くなり、平均寿命は想像がつかないほど短命だったはずです。それなのに現代のあらゆる機械を持ってでも製作不能と言われる巨石建造物が歴史上に突然あらわれています。特にヨーロッパや中東などの遺跡の周りは岩ばかりで、到底農作物ができない土地に、何万人もの都市を築くことは困難です。それらの遺跡が険しい山や岩の上や、砂漠の中にあるのは、昔は栄えていたので香辛料で巨万の富を得た人が造ったと言われますが、香辛料や香料よりも人間はまずエネルギーになる食べ物が必要です。敵が攻めてくるというのに、山の上や堀を掘って石を運んで、それをひとつひとつ積んでお城を作るでしょうか？何千本もの石柱にノミの跡がひとつでもありますか？　巨石遺跡、古代の石像建造物など現代の人間の肉体では到底できないことがあまりにも多すぎるのに、古代の人間がそれを造ったと、机上の空論ですまされています。これらの実物の写真を見ていただいて、本当に今の肉体の人間が造ったものか？これまでの思い込みを一旦横に置いて、考え直していただけたらと思います。



【最後に】

１９９８年から、かすかに舌が動くことで知らされるソラからの情報は、想像をはるかに越え、これまで聞いたことのない興味のあることばかりでした。知らされることは“目からうろこが落ちる”というそのものが多く、それらをつなぎ合わせたものが、このソラからの情報です。一見すると支離滅裂ですが、それらが全てつながっているのは「原子に意識がある」ということを当てはめれば、ご理解いただけると思います。

今回特にお知らせしたいことは、原子記号もそれぞれソラから直感やひらめきで知らされたということで、その直感やひらめきこそソラからの合図なのです。そのソラからの合図を言葉として受け止めていったことが、このソラからの情報になっていったのです。

今日、科学はとても進歩していますが、見えない世界を認めない今進んでいる道は行き止まりになると、５０ｋｍにも渡る先の折れた矢印のナスカの地上絵や、穀物模様などの複雑な模様でソラから知らせてきています。すなわち､各分野でばらばらに発達した説は最後には交わらない、ということに気づくことが、未来のためにもとても大切なことなのです。けれどもこのことは、人間を支配してきた星のせいで明らかにされることなく、チャネリングの情報というと偏見に満ちた目で見られ、認められることはありませんでした。そして地球の平和のためにと１４年にも渡りソラが知らせてきたのに、地球はさらに混沌としてきているために、宇宙では地球の変革計画が立てられたと伝えられ、急いでまとめてお知らせすることになりました。

歴史についても、残されている歴史書などは、当時の権力者の都合の良い内容のものだけが残されてきて、権力者に都合の悪い文献は焚書などされたことは国内外を問いません。それゆえに残されている文献が、必ずしも正しいことを伝えているとは言えません。権力者の都合の良いように書かれた文献が正しいという思い込みで、争いの絶えない地球なっているともいえます。ソラから知らされた歴史は“ソラからの真実の歴史”の本にまとめました。これらの本は、地球の平和のために知らされたソラからの情報で、このような情報もあるということを知っていただくために上梓しました。

宇宙でただひとつ、思いを具現化できる星は地球しかないそうで、肉体を終えた意識は消えることなくイシキだけの世界に存続しているようです。そして宇宙の最高傑作である人間として生きることは、宇宙の意識体の羨望の的でもあり、人間として肉体を持てることは奇跡でもあるそうです。そのことにも気づき、人間の滅亡を防ぐためにも、是非こういう情報が知らされている、ということを知っていただきたく思います。これから人間がどのような思いで進んでいくかで、地球の未来は決まると伝えられています。これまでの思い込みを横に置いて、地球の平和のために知らされているこれらの情報をお読みくださると幸いです。

最後に、これまでの常識を覆すこの情報を発信することができましたのも、陰でいつも支えて応援してくださった方々のお陰です。心よりお礼を申し上げます。また、更にＮＰＯ地球の平和のための謎とき会として、このソラからの情報を日本はもとより、世界の各地に届けるための活動を支えてくださっている会員の方に厚くお礼を申し上げます。

ソラからの物語　白木妙子著

9年間に渡り地球の平和のために知らされた情報を、小さな物語にまとめた冊子です。地球物語、イスラム物語、イエス物語、友達物語、ニウ物語などと６枚の地震雲を紹介しています。海外の方にも紹介できるように日本語とアラビア語と英語からなり、パレスチナ、イスラエルなどにも贈っています。

地震と雲　白木妙子著／S・フミヒロ編集

地球は希望の星として創られたので思いを実現することができます。そのことを理解できる人間を創りました。宇宙（ソラ）のものより。

地震の前にあらわれる変わった形の雲を、280枚の写真で紹介します。この本は地震の予知を目的に作ったのではありません。なぜ地震が起きるかという、これまでにない情報をお知らせするために作りました。

ソラの人間誕生記　白木妙子著／S・フミヒロ編集

人間は最初にストーンサークルや石室などで創られました。宇宙（ソラ）のものより。

宇宙の成り立ちについての説明や、人類発生の理由とその過程について、それらが有史以前の遺跡や製作者の分からない多くの石像と関係していることを解き明かします。

ソラからの真実の歴史　白木妙子著／S・フミヒロ編集

ソラのものやイシカミたち、過去人間だった意識が語る宇宙、地球、世界、日本の隠された真実の歴史です。宇宙や地球の成り立ち、イシカミについて、ヤマタイコク、出雲と倭の国、ヤマト、明治維新までの隠された真実について解き明かします。

地球物語　S.フミヒロ／シロキカヨコ共著

大昔に空からひらりひらりと、まるでクラゲのようにとても柔らかな、山のように巨大で、それでいて意識のあるモノが地球に降りてきました。そのことを知らせる証拠のさまざまな岩や岩絵を集めました。

ソラからの伝言　シロキカヨコ著／ソラプロジェクト編

ソラのものの思いが、今ようやく言葉として伝えることができるようになりました。いろいろな「なぜ」に答えます。

なぜ地球が水の惑星で、生物が住んでいるのか？
なぜ巨石文明が突然あらわれ、消えていったのか？
なぜ生きているような石像などが無数にあるのか？
なぜ人間が生まれたのか？
意識を持っているのは人間だけなのか？

このようなあらゆる地球の謎の答えを解き明かしてくれるのが宇宙（ソラ）のモノたちです。





ソラからの情報

2012 年 11 月 23 日　第一版第一刷発行

著者　　シラキノ　タエコ
監修　　ソラノ・フミヒロとソラ・プロジェクト
画像提供　ソラ仲間
発行所　　ソラ星出版株式会社

Homepage　http://book.ishikami.jp

© TAEKO SHIRAKI 2012, Printed in Japan